2010年2月1日　第118号発行　【毎偶数月1回1日発行】

市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京
NO.118
2010/2/1

発行者の住所：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ケ谷4-29-12-305　TEL:03-3423-0185　FAX:03-3402-3218
郵便振替：00120-9-359506　eメール：iken30@mwb.biglobe.ne.jp　ホームページ：http://www.1.jca.apc.org/iken30
＊隔月刊/購読料・送料とも年2500円、一部400円、65歳以上および身障者の方は年2000円　グリーン会員の方は年1000円

帝大野球部の
名遊撃手として
「マルオ」の名は有名だった。
白球を追って
とことんくらいつく
敏腕な守備に定評があった。
しかし、当の丸尾は
将来は絵描きか
哲学者になりたかった。
師とあおいだ
柏亭（はくてい）も鶴三（つるぞう）も
丸尾を熱心に指導した。
父上、母上は
僕がどっちの道にすゝむのを
お希（のぞ）みですか、
僕はご両親が
よろこぶ顔をみたいのです。
応召して北支にわたり
戦地で病にかゝってから、
丸尾は両親にそう書いた。
「戦争のために
祖国の美しい自然が
どんどん傷（いた）められるのが
たまらなく悲しい」
それが最後の言葉だった。

（窪島誠一郎『無言館を訪ねて　戦没画学生「祈りの絵」第Ⅱ集』講談社より）

丸尾 至
「釣り人のいる風景」
（無言館所蔵　作者の経歴は6ページ）

市民の意見　118号　目次

●特集　戦争犯罪を追及する
オバマ米大統領のノーベル平和賞受賞演説批判　安川寿之輔　3
「戦争」を清算する――イラク開戦から7年　細井明美　7
沖縄だけでなく、核は岩国にもあった　高橋武智　10
●2010年度防衛予算案を批判する
防衛省主導の軍備増強予算に異議あり！　杉原浩司　14
●運動の現場から
葛飾マンションビラ弾圧事件、最高裁不当判決を糾弾する　大西一平　17
とめよう9条改憲！大阪意見広告運動にご協力を　原田恵子　18
伝えたい想い――レイプクライシス・サバイバーズネット関西の活動から　岡田実穂　19
絵葉書『沖縄・辺野古〝生きている〟って、伝えたい』のご案内　山本英夫　20
●世界をまたぐ平和運動
平和と非暴力を世界に呼びかけるワールドマーチ　太田夏子・佐藤真喜子　葛西則義　22
●意見広告運動　事務局から　27
●117号の読者懇談会より
「普天間問題」をめぐる攻防の現状　国富建治　29
●文化
巻頭詩　短歌　路地に花咲く　鈴木サダ子　2
連載エッセイ⑮　鏡餅完売　鈴木一誌　26
映画の紹介　二つのレジスタンス映画の名作　本野義雄　30
本の紹介『「戦後時代」の夕焼けの中で』　天野恵一　31
連載マンガ㉓　ふしぎの国のありか　まつだたえこ　32
●情報
事務局だより　詩集・歌集・デモなど　吉川勇一　33
2月の読者懇談会のご案内　10
2月の9条・25条集会のご案内　25
インフォメーション　32
読者のおたより　34
会計報告／編集後記　36
◆カット　村雲　司　◆題字　安西賢誠

☆２月の読者懇談会のご案内☆
・テーマ　話題の本『ほびっと』著者の中川六平さんを囲んで（本誌Ｐ.10高橋論文参照）
日時：２０１０年２月１９日（金）午後７時　参加費５００円／ピープルズ・プラン研究所（文京区関口１－４４－３信正堂ビル２Ｆ
地下鉄有楽町線「江戸川橋」駅１－ｂ出口５分　Ｐ.10地図参照　電話：０３－６４２４－５７４８）

路地に花咲く

鈴木 サダ子

今日もまた暑くなるらし空見ればやかましきヘリゆうゆうと飛ぶ

フェンスに接して住める主婦達の集いに基地は話題にならず

自衛隊居すわり反対の赤き旗見上ぐる空にひばり鳴き過ぐ

年金も納め終わりて六十のわが峠路の行方(ゆくえ)知れずも

しのびよる死のごとくにもじわじわと核の恐怖の身にせまる夏

子の問いに戦時のさまを語りゆく語調いつしか高まりていつ

基地跡のしろつめ草の咲くなだり平らけき世を子らは花つむ

腐敗せし政治と思(も)えど術もなく老二人こたつにいかり発散す

●作者プロフィール●

1924（大正13）年、埼玉県で斎藤家の次女として生まれる。1939（昭和14）年より立川飛行機に勤務し鈴木五朗と結婚、戦後、基地の街である東京都立川市に住む。50歳を超える頃から詩や短歌を学び始める。1989(平成元)年逝去。ここに掲げた短歌は、『路地に花咲く　鈴木サダ子歌集』(解説・小高賢）左右社、2009年より。本誌に連載エッセイを寄せてくださっている鈴木一誌さんは、サダ子さんの長男。

特集　戦争犯罪を追及する

2001年の9・11以降、日本も巻き込まれる形で「戦時」が始まり、それはオバマの米国を中心に現在も続いています。一方では、イラク戦争の犯罪性を追及し、ベトナム戦争下での日米間の密約を明らかにする動きも。本号は、米・英・日の現状を追います。

オバマ米大統領のノーベル平和賞受賞演説批判

――アメリカの構造的な戦争国家体質

安川　寿之輔

2009年12月10日のノーベル平和賞受賞演説は、09年1月の大統領就任演説の1・7倍もの長さである。就任1カ月後のアフガン戦争への2万余の増派について、授賞式の9日前にも「2010年半ばまでの3万人の増派」を発表したばかりのバラク・オバマ米大統領の「平和」主題演説のことである。前日公表の米国世論調査結果でも、大統領が受賞に相応しいと考える国民がわずか19％であり、演説が長くなったのは、懸念通り、戦争遂行についての無理な正当化、釈明、弁明の長口舌のためであった（的外れの平和賞授与の意外性は、日本人にとっては、「核密約」の佐藤元首相のブラック・ユーモア的受賞で経験済み）。

◆「チェンジ」なき戦争政策

オバマがいくら「私が二つの戦争の最中にある国の軍最高司令官」とはいえ、演説はいきなり「戦争は…昔から人類とともにあった」という問題発言で始まった（佐原真・元国立歴史民族博物館副館長によると、戦争考古学の成果では、400万年の人類史中、「1万年前までのあいだは戦争はありませんでした」――1996年2月1日「朝日新聞」天声人語）。以下、大統領は「平和を維持する上で、戦争という手段にも果たす役割がある」「戦争は時として必要」「武力は人道的見地から正当化できる」「平和維持において、…軍隊が果たし得る役割」「平和には犠牲が伴う」という、同類の「正戦」論を繰り返した。なかでも「世界に悪は存在する。…武力が必要」「国民の血と力で60年以上にわたり、世界の安全保障を支えてきたのは米国なのだ」「自国を守るために必要であれば、私には一方的に行動する権利がある」という部分で、私は、「悪の枢軸」論で「一国軍事覇権主義」を突進したジョージ・ブッシュ前大統領を否応なく思い出した。

オバマが大統領選中にイラク戦に反対し「わが国を根本的に違う方向にチェンジしよう！」と、「チェンジ」を繰返していただけに、失望は大きい。自国紙が「戦争する大統領、平和賞受賞に似つかわしくない演説」と報じたくらいだから、世界的にも「前脚で増兵宣言、後脚で平和賞」「オバマ、戦争を弁護」（中国紙）と全般的に不評であったが、私が一番納得できたのは独紙の「まるでブッシュ前大統領が話しているように聞こえた」であった。

『週刊金曜日』（2009年4月17日号）特集が「オバマの戦争――チェンジなき世界」と題したように、大統領が期待された変革の道を選ばなかったことは明らかである。①前政権のゲーツ国防長官の横滑り、「新自由主義」経済政策推進者の起用、「シオニスト」自称のバイデン副大統領を筆頭に、エマニュエル首席補佐官、クリントン国務長官ら親イスラエル派起用の人事の継続性。②イラク撤退については、『金曜日』（2009年9月4日号）の成沢宗男が、国連本部の6倍の敷地の米大使館、世界有数の超巨大な5基地を含む50をこす本格的な新

基地、5万人の「残留部隊」、米軍地位協定の「イラクの諜報省、内務省、国防省は今後10年間、米軍の監督の下に置かれる」等々の「秘密条項」を列挙して、「完全撤退」のウソと「イラク永久占領の野望」を論証した。③アフガン増派については、同じ成沢が米軍の「世界支配に向けたアフガンの軍事的植民地化」の狙いを指摘（同誌09年10月30日号）。④オバマは、9月国連演説ですでにアフガン戦を「平和のために必要な正しい戦争」と正当化していた。

受賞演説の個々の問題点も列挙しよう。①「戦争の一つは終わりに近づいている。もう一つは米国が求めなかった戦争」という把握の無理については、再論する。②米国が武力行使の際の「交戦規定を守る主唱者」云々に対しては、反戦イラク帰還兵の会&アーロン・グランツ『冬の兵士――イラク・アフガン帰還米兵が語る戦場の真実』（岩波書店、2009年）が、二つの戦場で規定が恣意的に歪められ「殺人の免罪符」になっている「戦場の真実」を暴いている。③米国の戦争史に触れながら、ベトナム戦争と（貴重な）その敗戦体験に言及なし。④米国の良心といえるワタダ中尉ら300余名の「良心的兵役拒否」申請や数万人におよぶ脱走兵の存在にも言及なし。

⑤キング牧師の名が演説中に最多5回も登場する。J・キー『イラク――米軍脱走兵、真実の告発』（合同出版、2008年）が語るように、多くの貧しい若者を騙して戦場に追いやる「激烈なる格差社会」の「貧困徴兵制」のことは、堤未果『貧困大国アメリカ』（岩波新書、2008年）をはじめ広く知られている。そうであれば、キング牧師は、ベトナム戦争当時の米政府の戦争政策が（黒人問題の根幹である）貧困の解決の最大の障害であることに気づき、反戦運動で「軍国主義の狂気」と闘ったことで知られている。それを、キングらの「非暴力主義は、いかなる場合でも現実的で可能だったわけではない」という文脈で、大統領が言及するのは失礼。⑥演説の末尾3分の1を占める「公正で永続的な平和」構築に「必要な三つの方策」は、冗長で無内容の印象。

◆イラク・アフガン戦争は侵略戦争

オバマは就任演説でもプラハ「核廃絶」演説でも「テロとの戦い」を語っているが、悲劇は、その認識が現地の米兵士と両国国民の認識に比べ、余りにかけ離れていることである。①前掲『冬の兵士』『イラク』の米兵たちは共通して、「我われ米兵自身がテロリスト」「…ところが、本物のテロリストは私だった。そして本当のテロリズムはこの占領」と認識している。②アフガン国民はどうか。09年に5度目のアフガン取材をした白川徹は、現在「最もタリバンをよく知る人物」の元外務省トップの証言を紹介している（「アフガン人は何に怒り、何を求めているのか」『世界』09年9月号）。タリバンは欧米では金目当ての傭兵と誤解されているが、「誰が金のために自爆攻撃をするかね。『主義』で動くから、自爆までやるのだ。…レジスタンスの意識だ」、アラビア語で「学生」という意味の「タリバン」が、今は「アフガンの自由と独立のために戦う者」に変わった。

③この証言は、『冬の兵士』の米兵証言と見事に符合する。「仕立屋や床屋や自動車修理工が…占領に反対して武力を用いたレジスタンスに参加」「今米国がやっていることは無辜の市民をテロリストに変えること」。「テロリスト」とは「圧倒的多数が占領軍から土地を取り戻そうと戦っている、現地の普通のアフガン人」。④しかもこの認識は、06年の米情報機関秘密報告とも間接的に符合。前政権は対テロ戦争で「世界がより安全になった」と主張するが、秘密報告は「イラク戦争がテロ増の主因」と、政府主張を否定。⑤現地世論調査も同様である。05年の英国防省委託極秘世論調査で、国民の82％が駐留反対、67％が占領で治安悪化、45％が自爆攻撃支持、英軍管轄の州では65％（05年10月24日「毎日新聞」ほか）。07年日米英3国テレビ局調査では、駐留反対79％、増派で治安悪化72％、駐留軍への攻撃「容認」57％である（07年9月12日「赤旗」）。

つまりオバマは、ブッシュの対テロ戦争をチェンジせず、「平和のため」の正戦

と称し増派・拡大さえしているが、「テロリスト」は、軍事占領＝米軍「テロ」から自国の「自由と独立」の回復、民族自決の原理のために自爆さえ厭わず武力抵抗している現地の国民のことである。プラハ演説が「私たちは…アフガン国民が自らの将来に責任を負えるよう支援」と語ったが、国民は、それを祖国の「軍事的植民地化」を意図した侵略戦争と認識し、命がけで抵抗しているのだ。両者のこの認識の決定的なギャップこそが、不正義の「テロ」戦争を担わされている（ＰＴＳＤ症激発の）米兵の士気を削ぐ根幹的条件である。

「イラクのベトナム化」は早くからの指摘であるが、米兵の自殺率（10万人中17・3人）は、早くも03年中にベトナム戦争の自殺率を超えた。5年間で3万7000名近い兵士が脱走。数千名が帰国後に無許可離隊。300余名が良心的兵役拒否を申請、200余名が国を捨てカナダ政府の庇護（難民認定）を申請中。「裏口徴兵制」と悪評の政策で、同じ兵士が繰り返し派遣を強いられる。07年秋に両国で展開中の兵士の12％と17％が、抗鬱剤や睡眠薬の服用で辛うじて日々の戦闘を継続。公表されないが、毎日18人の帰還兵が自殺（『冬の兵士』）。「死者100万人の推計も」とされるイラク人の殺戮をふくめ、こうした悲惨な現状にありながら、「イラク反戦の母」S・シーハンやJ・フォンダらの反戦運動が拡大しないのは、徴兵制がなくなり、兵士が社会的発言力の弱い人口0・5％以下の貧困層に限られ、メディアの保守化に加え、「戦争の民営化」が劇的に進み、09年現在、民間軍事請負会社が630社、約15万の米兵に対し、相対的に高給の民間従業員が18万という事情も重なる（堤未果ルポ『金曜日』09年2月6日号）。

オバマは、受賞演説でアフガン戦を「米国が求めなかった戦争」と語るが、これもあやしい。9・11「同時多発テロ」の（1カ月足らず）直後の10月に報復のアフガン戦争（「不朽の自由作戦」）が開始された、と一般に理解されている。しかし米国のアフガン戦は5年以上前に立案され、01年5月に中央軍によって練られた計画に基づいて「不朽の自由作戦」は作成された（『金曜日』09年10月16日号）。さらに成沢宗男は、孫崎前防衛大教授へのインタビューを通して、問題の「9・11」自体の陰謀・謀略性について考察する。

後にブッシュ政権の軍事中枢を握るチェイニー（副大統領）やラムズフェルド（国防長官）らが1997年にシンクタンクを結成し、2000年に公表した「米国防衛の再構築」で、世界の一極支配実現のためには「真珠湾攻撃のような破局的、かつ何かを誘発する」事件が必要と主張されていた（ブッシュ自身が事件直後に「第2の真珠湾攻撃」と発言）。孫崎教授は「第2の真珠湾」を期待する側が（テロ攻撃の危険の放置により）、それを可能にする状況を作ったと「言い切ってよい」と答弁。成沢は、結局、「真珠湾攻撃のような…を誘発する」謀略によって、「対テロ」戦争を口実にした空前レベルの軍備拡大が可能になり、また「9・11」の結果、両国への侵攻ができた、と結んでいる（同誌09年9月11日号）。謀略というものは、衝撃的で信じ難い大事件ほど国民の目を欺くことができるのかナ、というのが私の感想である。

なお、関連して「赤旗」（10年1月14日）の「イラク戦争検証本格化」と題する記事は、オランダの独立調査委の結論「侵攻は国際法違反、政府の「支持」は不当」の報告書と並んで、英国の独立調査委公聴会が、ブラウン前首相はブッシュにたびたび書簡を送り、侵攻1年前から秘密裏に英国の参戦を確約していた事実を元側近証言により解明した、と報じた。

◆「良心的兵役・軍務拒否」による抵抗

オバマはまた、就任演説で「テロリスト」に「我われは、お前たちを打ち負かす」と宣言したが、この見通しも危うい。米紙著名コラムニストが「サイゴン陥落のような、恥ずべき退却の悪夢が再び…」と書いたのは05年のこと（7月7日「毎日」）。09年4月に米下院外交小委で証言した「戦略問題研」のコーデスマン博士は、道路爆弾・ロケッ

ト弾攻撃等の増大数をあげながら、米軍やNATO軍は「武装勢力の影響拡大を阻止できず…消耗戦を強いられている。我われは敗北しつつある」と証言した。さらに（パウエル前国務長官の主席補佐官だった）退役陸軍大佐は、オバマ「新戦略」演説のベトナム戦との「違い」の強調に対し、「ベトコンは隣国ラオスやカンボジアに逃げ込み、補給を受けた。タリバンにとってのパキスタンも同じ。しかもベトコン同様に死を恐れない。こうした相手に勝つのは困難」と証言している（09年12月3日「中日」。なお「ベトコン」はベトナム南部解放民族戦線に対する米軍による蔑称）。

「20年後、どの国が世界のリーダーか」の米国世論調査結果は、97年の米国56％中国9％が、中国39％米国37％に逆転。「アフガン・パキスタンでの失敗は、（一つの超大国が支配する世界の）公式の終わり…かも」「（欧米から）世界の重心が移行する過程が続いている」という関係者の証言もある（「赤旗」10年正月連載〈新秩序に向かう世界〉）。

オバマ、つまり米国は、なぜ戦争政策をチェンジできないのか。W・ブルム『アメリカの国家犯罪全書』（作品社、2003年）の訳者が「本書は、米国の外交政策の基本が、政権次第で変わるものではなく、より構造的な問題であることを極めて明瞭に示している」と解説。J・アンドレアス『戦争中毒――アメリカが軍国主義を脱け出せない本当の理由』（合同出版、2002年）が米の戦争政策は、オバマの言う「平和維持」のためではなく、「大銀行、大手建設会社、兵器産業、石油業界等の利益」維持のためと書いたように（アフガンは天然ガスの宝庫、イラクは膨大な石油の埋蔵国）、米国が戦争を克服するには、構造的な軍事国家体質を変革しなければならない。

最後に「良心的兵役拒否・軍務拒否」について付言しよう。①なぜなら、（原爆投下出現以前に採択の）「国連憲章」が「武力による平和維持」の例外を残したのに、その例外さえ否定した（原爆投下後の）日本国憲法9条がありながら、私の年来の大学生アンケート結果では、第1次大戦以来の貴重な世界的な「良心的兵役拒否」の思想と運動を、日本の若者がほとんど（9割以上）教えられていないからである。②イラク派遣命令を拒否したワタダ陸軍中尉は実質勝訴し、間接的なイラク戦争協力を拒否したドイツのパフ少佐も無罪判決となった（市川ひろみ「抗命する義務」『わだつみのこえ』09年11月号）。③08年4月の「自衛隊派遣は違憲」の画期的な名古屋高裁判決は、渡辺久丸『兵役拒否の人権化は世界の流れ――国際人権法・憲法からみる』（文理閣、2009年）が強調するように、「平和的生存権」をすべての基本的人権の基礎の「基底的権利」と初めて認めた上で、「憲法九条に違反する戦争の遂行等への加担・協力を強制される」場合に、裁判所に「当該違憲行為の差止請求や損害賠償請求等の…救済」を求められるとした。

④（西）ドイツは、憲法に「何人も、その良心に反して、武器をもってする戦争の役務を強制されない」の「良心的兵役拒否」を規定した。その成果として、「良心的軍事拒否国家」の提唱で知られる故小田実によると、1999年時点で青年の60・8％もが徴兵制の軍務でなく、兵役拒否による代替業務を選ぶ時代を迎えている（『戦争

▼表紙絵の作者▲

丸尾 至
（まるお・いたる）

1920（大正9）年、東京・文京区に生まれる。1942（昭和17）年4月、東京帝国大学文学部美術史学科に入学し、野球部に所属。父母の期待を一身にあびながら、絵も独学。その後、石井柏亭、石井鶴三、前川千帆に師事。1944（昭和19）年1月20日、応召、北支派遣第59師団53旅団独立歩兵44大隊（衣第4295部隊）、北支甲第1823部隊橋田隊に所属。翌1945（昭和20）年8月30日、吉林省陸軍病院にて戦病死。享年25歳。

か、平和か――「9月11日」以後の世界を考える』大月書店、2002年）。このドイツの現実は、世界的な徴兵制廃止の趨勢とともに、人類が戦争を克服する「イマジン」の世界が夢想や妄想でない可能性を示唆している。

⑤『冬の兵士』代表としてイラク戦証言集会参加で09年秋に来日したアダム海兵隊予備役軍曹は、日本の憲法9条に共感しながら、「今の日本では憲法九条は守られていない…アメリカの対外政策に…反対して欲しい」と訴えた（芦澤礼子「『冬の兵士』日本各地でイラク・アフガン戦争を証言」『軍縮問題資料』09年12月号）。これは、05年10月に、米軍・自衛隊が先制攻撃的な軍事行動を地球規模で行なうことを公然と宣言した「日米同盟――未来のための変革と再編」の成立を許し、さらに「海賊対処法」へと進み、いまや「臨戦国家」体制（纐纈厚――平和憲法ネットワーク・やまぐち『平和市民』第5号）と呼ばれる事態を許容しつつある日本国民への真っ当で重い重い問いかけである。

かつて日本は、日独防共協定・日独伊3国同盟を選択して破滅への道を突き進んだ。いままた、（オバマ新大統領を迎えても）構造的な戦争国家体質を克服できないアメリカとの地球規模での「日米軍事同盟」を強化して、日本が世界に戦争の惨禍を拡散する道を選択するのか、私たちは文字通り歴史の分岐点に位置している。「韓国併合」100年、日米安保改定50年という節目の年を迎えて、私たち主権者日本国民は、「冬の兵士」のアダム軍曹らと、米軍基地県内移設反対の沖縄県民の問いかけに、どう応えるのか。

「国連憲章」を思想的に超えた「日本国憲法」前文冒頭の文章は、「日本国民は、…政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する」とある。つまり、主権在民の宣言と私たち国民が政府に2度と再び戦争を起こさせないようにすることの決意が、同じ一文のなかで密接不可分のものとして、とらえられているのである。

（やすかわ・じゅのすけ、「不戦兵士・市民の会」副代表理事）

「戦争」を清算する――イラク開戦から7年

細井　明美

●イラク戦争の検証

「スンニ派急進主義者、追放されたバース党員、シーア派原理主義者との間で内戦が起きることは予測されていたが、これほどの暴力が生まれると知っていたらブレア政権はイラクに侵入しなかっただろう。ムバラク大統領（エジプト）はこの戦争が100人のビンラディンを生むと警告してきた」。現英国情報局秘密情報部の責任者であり2003年英国特使としてバグダッドに駐在し、ブレアの政治顧問も務めたジョン・サワーは2009年12月19日に開かれたThe Iraq Inquiry（イラク検証委員会）の証人喚問でこのように証言した。

イラク開戦から6年後の09年7月30日、英国はThe Iraq Inquiryを設立し、戦争に参加した経緯と軍事関係のすべて、そして占領後の復興支援策などイラク戦争を全面的に振り返るための調査を開始した。これまでも英国はイラク戦争に関連した調査を4回（英国下院外交委員会調査、フットン調査、英国議会国防委員会調査、バトラー調査）行なってきたが、しかしそれらの調査が政府から独立したものでなく、個人の責任（おもにトニー・ブレアに対する）が問われなかったとして、亡くなった兵士の遺族たちは、05年10月、政府に公的な調査を新たに求めた。

遺族たちの要求は、一度は政府に拒否されるが、06年7月27日再審を求める権限が裁判所によって認められ、07年6月、保守党が「記憶が消え、記録が破られ、文書の追跡ができなくなる前にイラク戦争の調査を実施するべきだ」と主張して英国議会に

法案を提出する。

一方、イギリスのシンディ・シーハンといわれるローズ・ジェントルは08年2月英国最高裁判所に「政府は戦争の合法性を説明する独立した調査を行なうべきだ」と要求。それを受けて08年3月18日、保守党と自由民主党は彼女たちの要求を容れる形で改めて法案を提出した。翌09年6月15日、ブラウン首相（労働党）はバスラに駐留する軍隊が撤退した後にイラク戦争の調査を行なうと発表。そしてイギリス軍が撤退した7月末、委員会は正式に発足する。

ここにいたった経緯にはジャーナリズムの力が大きく作用した。たとえば04年3月の英国議会国防委員会調査では軍備品の不足、戦後復興の計画がまったくなかったことを大きく報道し、イラクにおける大量破壊兵器の存在を調査したバトラー調査では個人の責任が取り上げられてないことを強く非難した。その結果、08年には政府への圧力は無視できないほど大きくなっていった。

●ブレア前首相も証人に

7月30日、委員長ジョン・チルコットは次のように述べる。「この検証委員会の目的は英国とイラク戦争との係わり合いを調べることです。すなわちイラク戦争に参加した経緯とそこで何が起きたのかを出来るだけ正確に迅速に調査し、かつそれを教訓として、誤りがあったならそれを将来に生かすため議会に報告します。議会はそれを受けて討議を行ないます。調査の対象となるべき期間は01年から09年7月末までとします」。首相から任命された4人の委員（歴史学者、公務員、外交官）と彼らを補佐するために2人の専門家（軍事：ロジャー・ウィラー卿元参謀長、国際法：ディム・R・ヒギンズ元国際司法裁判所所長）が配置された。

委員会の証人喚問は2009年11月24日から始まり今年2010年2月前半までかかると予想され、証人はブレア前首相を始め、03年当時の外務大臣、駐米英国大使、国連大使などにも及ぶ（本稿が掲載される2月1日にはすでにブレア前首相の証言も行なわれているはず）。証言はすべてウェブサイトに公開され世界中の人間が読むことができる（http://www.iraqinquiry.org.uk/）。

●だから傀儡政権に？

イラク開戦前の03年2月10日、英国の軍事関係者たちは、ラムズフェルド米国防長官が米国内の反対派を抑えイラク攻撃を決めていながらも、戦後の復興計画がまったくないために、急遽彼ら自身で計画の青写真をたてることとなる。この計画を補佐したティム・クロスはこの時点でイラク側に次の政府を担う組織が皆無であることに気づく。

そしてイラク戦争は始まり、英米はイラクに侵攻するが、占領後もイラクには公的な政治指導者は存在しなかったと証言する。ティム・クロスは自分たちがイラクの歴史・国の状態をいかに把握していなかったかを知る。ある者の言葉を借りれば「ソケットやプラグはたくさんあるが、どれも接続されていない」。つまりサダム政権が倒れたあとに出てきたのは、サダムに追放されたチャラビ、アラウィなどの亡命政治家であり、イラク・イラン戦争で追われイランへ亡命していたハキム兄弟（シーア派）だった。彼らの共通点といえばサダムに対する憎しみだけである。

02年12月のイラク侵攻を決定したロンドン会議においても、彼ら亡命政治家たちは自分の利益を主張し互いにののしりあっていたという（パトリック・コバーン（大沼安史訳）『イラク占領――戦争と抵抗』緑風出版、2007年より）。

ブレア政権の外交アドバイザーであり現駐米大使であるナイジェル・シェインウォルドは、米国がスンニ派とシーア派の内紛を悪化させるだろうと予測していたことを証言する。

検証委員会の規定では英国政府と共有されている外国（アメリカを指すのだろうか）の資料も調査し、ヒアリング対象は外国当局者にも及ぶことになっている。委員会の調査がこれからどのような展開を見せるか興味深い。

イラク南部の涸れた大地
出典：2009年7月16日付 Al-Sharq Al-Awsat（ロンドン）

●イラクが枯渇する

400万人という難民を出したイラクだが、土地が砂漠化することによりさらに多くの難民が出ると予想されている。かつて4大文明の発祥の地といわれたメソポタミア（イラク）の地には二つの大きな河、チグリスとユーフラテスが流れている。長さ2780キロのユーフラテス河はトルコ山間部を源としてシリア領内を通過する。

一方1900キロのチグリス河はトルコからイラクへ流れ、イランからの支流もチグリスに注ぐ。両河川の合計水量は年間800億トンだったが、トルコ・イラン・シリアの治水によって水量が減少しつつある。European Water Association（ヨーロッパ水協議会）の報告によると、2040年までにイラクは両河川の水を完全に失うと警告している。特にチグリス河がトルコの巨大ダムにより年間300億トン流水量を減らし、その流れが変わることで下流にある水力発電所も大きな影響を受けるだろうといわれる。実際チグリス河の水量はこの25年間で25％減少している。

また1933年にトルコはユーフラテス河の上流にも世界第6位のアタチュルクダムを完成。このダムは現在89億キロワットを発電し、ハラン平原を潅漑し18万エーカー以上の農地を生み出した。農家はこの土地で品質の優れたトルコ綿を生産している。が、これによりユーフラテス河の流水量が20％減少した。

イランとシリアもチグリス河流域に多くのダムと貯水池をつくりイラクの水不足に拍車をかけている。またイラク南部にはチグリス河とユーフラテス河が合流したシャットゥルアラブ河があるが、イランがそこへ流れる支流の流れを変えたため塩分濃度が増加、塩害が発生し耕作できなくなった農民が難民化している。つまり、シャットゥルアラブ河の水位が低下したために海水が逆流現象を起こしたのだ。

またダムから流れる土砂は両河川の水路・運河に沈殿し、さらに氾濫源にも堆積する。もともとイラクでは土壌そのものが塩分を含んでいるため大量の水で土地を洗い流す必要があった。しかしそれもイラク政府の予算不足で土砂を取り除く水路の清掃ができない状態だ。また水路の清掃ができないために川床に異物が堆積し、ゴミや未処理の汚水が川に捨てられているのも公衆衛生上大きな問題となっている。

数年におよぶ戦争もイラクの砂漠化に影響を及ぼしている。砂漠防止化に役立ち農民の収入源であったナツメヤシが戦争のたびに破壊されたからだ。いまや農民が捨て去った土地はトゲのある潅木で覆われ荒地となっている。

南部だけでなく砂漠化はイラク北部にも及んでいる。ニネヴェ州では家屋・道路・農地が砂で覆われてしまったので70カ村の農民が土地を離れた。

●「戦争」の検証は国益

戦争は人びとの生活を根底から変える。家族を失うだけでなく未来そのものも失う。イラク人が再び元の生活を取り戻すには何年かかるのだろう。多国籍軍としてアメリカの戦争を支援した日本も彼らの生活を奪った責任があるが、それをどう償うべきなのか。

英国の検証委員会はイラク戦争に関わる調査をするが、それはイラクへの謝罪を意味するものではない。紛争に関して将来の外交政策への正しい判断を求めるためのものだと明言している。私はそこに戦争をし

続けてきた国家のしたたかさを感じる。イラク戦争を検証することで、過ちの責任をブレア政権に押しつけ、現政権は次のステップへ進むための準備をする。謝罪は兵士の遺族のために行なう。戦争を清算することで、英国は世界に対してフェアな印象を与えることができる。そしてイラクと新しい関係を結ぶことができる。すでに英国の企業はイラク内で原油開発の取引を行なっている。したたかではあるが、それでもこの検証によってこれまで見えなかった事実が明らかになるだろう。私はそれに期待する。

さて、日本でもイラク戦争を検証しようという動きがある。すでに趣旨に賛同した民主党・社民党の議員数名と提案した市民側との勉強会も行なった。提起しているのは、①「イラク戦争支持の政府判断に関する見直し」「自衛隊イラク派遣の判断の是非」「イラク復興支援への日本の関わり」の3点を検証する、調査委員会を政府が設立すること。同委員会が、事実関係についての情報開示や調査を行い、個人も含めた道義的・法的な責任の所在を明らかにすること。②調査委員会による検証や、そのプロセス、最終報告などが、最大限公開され、誰にでもアクセスできるようにすること。③検証による最終報告を受けての、日本政府としての見解を国内外に発表すること。

開戦から7年。さまざまなことが少しずつ変わり始めている。

参　照：The Middle East Media Research Institute (MEMRI)' The Iraq Inquiry

（ほそい・あけみ、『Baghdad Burning』訳者）

沖縄だけでなく、核は岩国にもあった

――密約文書でなく事実の検証を

高橋　武智

これは回顧談ではない。過去の出来事が現在の問題にかかわることがあるし、新しい光を当てることさえある例として読んでほしい。

☆べ平連時代の米軍解体運動

べ平連の時代、米軍兵士相手に活動していた集団はジャテックと呼ばれた。何よりもこの名は1967年に始まった脱走兵援助運動と結びつくが、70年の方針転換後、同じ名前は米人活動家・米兵との緊密な協力のもとに展開された――当時のオーバーな呼称を使えば――「米軍解体運動」を指すのにも使われた。

♪2月の読者懇談会のご案内♪

話題の本！『ほびっと　戦争をとめた喫茶店――べ平連1970－1975 in イワクニ』の著者、中川六平さんを囲んで

本号掲載、高橋武智さんの論考「沖縄だけでなく、核は岩国にもあった」でも紹介されている、もと岩国のコーヒー店「ほびっと」のマスター、中川六平さんをお招きして懇談します。べ平連時代のなつかしい話に花が咲くことでしょうが、「68年」が注目される近年、「歴史」としての〝あの時代〟に関心のある若い人にも意味ある会だと思います。

2月19日、翌20日と、市民の意見30の会・東京のイベント続きですが、是非両日ともおいでください！

★日時：2月19日（金）午後7時～9時
★場所：ピープルズ・プラン研究所（東京都文京区関口1――44――3信正堂ビル2F）
TEL：03-6424-5748
★参加費：500円

その有力な拠点の一つ、海兵隊岩国基地のすぐ近くに1972年2月にオープンしたコーヒーハウス「ほびっと」の初代マスターをつとめた中川六平さんが、当時の日記やメモをもとに、このほど『ほびっと　戦争をとめた喫茶店』を出版した。これは米軍解体運動について書かれた最初の単行本である。

もちろん72年に突然ほびっとが誕生したわけではない。長い前史があったし、本の前半はそれに充てられている。兵士自身による抵抗新聞『センパーファイ』の刊行、錦帯橋畔でのラヴ・イン、帰隊した脱走兵ノーム・ユーイングの軍事裁判へのジャテックの介入（具体的には、小野誠之弁護士の参加と、鶴見俊輔さんとノームをかくまった主婦・神谷康子さんの証言）、たこ揚げによって米軍機をとめた子どもの日の行動、岩国の核に関する楢崎弥之助代議士の国会での追及、ジェーン・フォンダらからなる演劇集団・FTAの公演などなど。行動のたびに中川さんは京都―岩国間を往復したのだから、ご苦労さんだった。

なかで感慨深く思い出すのは、「ハエがハゲタカをとめた」と表現されたたこ揚げだ。止めたのは訓練機だったにしても、いざというときはベトナム人民の闘いに直接呼応することもできるという実感を与えてくれた。

☆米反戦兵士からの聞き取り調査

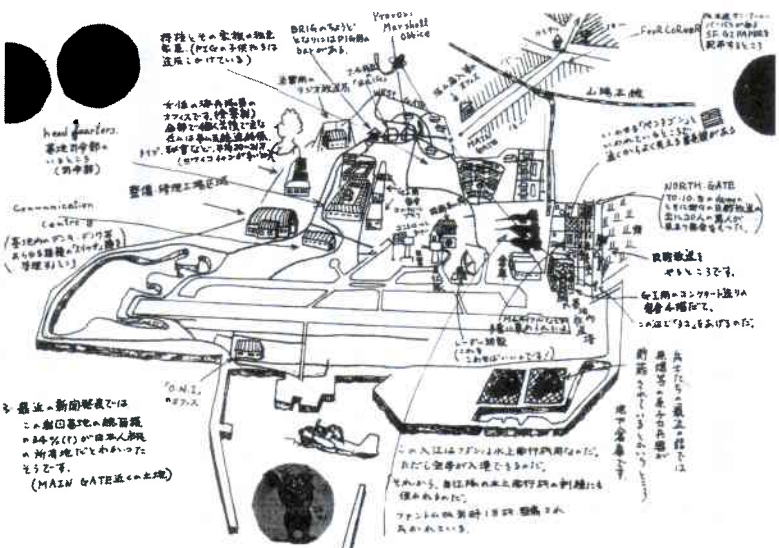
本稿執筆にあたり初めて目を通せたのだが、このあたりの経過を、68年に召集後、早くから兵士運動の組織にあたったD・コートライトの『反乱する兵士――ベトナム戦争中のGIの抵抗』（英文。初版は75年、2005年に増補版）はこう書いている。

「（海兵隊員たちは）70年1月に新聞『センパーファイ』を創刊した。このささやかな始まりから、兵士グループは急速に発展をとげたが、それは部分的には〝べ平連〟から提供された価値ある支援のおかげだった。米国における同種の運動よりはるかに以前から、べ平連は米兵のあいだの抵抗の重要性を認識し、数年間にわたり、脱走兵への援助やベトナムから休暇中の兵士へのビラ配布など精力的なプログラムを実行していた。したがって、岩国の海兵隊員が軍内部から組織を始めたとき、日本市民はただちに彼らへの支援にかけつけた。センパーファイの最初期の行動の一つ、4月12日の〝ラヴ・イン〟は、日本の伝統的なお花見に事寄せて、約50人の海兵隊員が参加した。……」

過大なと思うほどの評価だが、グローバルに展開され、米軍敗北の究極的原因となった兵士の抵抗を包括的にまとめた本だけに、それなりの妥当性はあるのだろう。

ここでは、基地内に核兵器が貯蔵されているという噂を実証するためのプロジェクト・チームの活動に話をしぼるが、『ほびっと』では「藤川さん」と呼ばれている掛川恭子さんが「岩国の二年」（『となりに脱走兵がいた時代』所収）のなかでこう簡潔にまとめている。

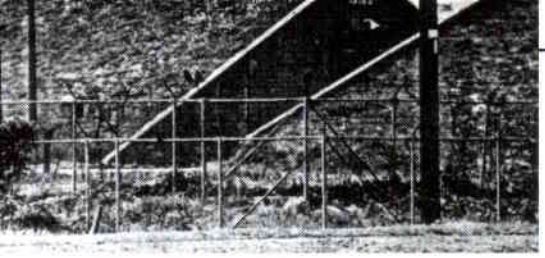
「それならとはじまったのが、基地内の反戦兵士からの情報収集だった。人気のない宮島の浜や、場末の喫茶店での聞き取り調査のつみかさね。Tはねちこくねちこ



岩国基地の見取り図：ジャテックと反戦米兵の緊密な関係なしにはできなかった図。右下の突端部に疑惑の核弾薬庫がみえる。『ジャテック通信』第2号（1971年5月）から転載。

く、あれもこれも聞き出していった。そして最後は現場検証。海に面した基地の一画に、土を盛りあげて芝をはった地下格納庫があり、以前からそこに核がしまわれているのではないかといわれていたのだが、ある晩連れていかれたのは、まさにその場所だった。そうやって集めた情報をもとにおこなわれたのが、楢崎発言だった。楢崎発言の直後、反戦兵士四人が反戦デモに参加したという理由で逮捕され、ただちに本国の拘置所送りになったことからも、米軍の動揺が見てとれた」（Tとしたが、原文では筆者の名前になっている）。

調査に加わった者の共通の想いは、広島から50キロと離れていない岩国に核を置くなんて、という怒りだった。



弾薬庫の写真：核を貯蔵していたＩＡＴＡ－６弾薬庫。『ジャテック通信』第５号（1971年12月）から転載。

☆岩国基地に核兵器は存在した

評判の池澤夏樹の長編小説『カデナ』は、北爆のため嘉手納基地の滑走路からＢ52爆撃機が飛び立った68年夏の沖縄を舞台に、飛行計画書を入手してハノイへ無線で打電するというスパイ活動に従事した、うちなーんちゅ2名と米兵とベトナム人各1名の物語だ。個人の責任で引き受けた行動だが、それぞれの幼い頃・若い頃に味わった戦争体験を踏まえていた。10月末で北爆が中止され活動が終わったとき、全員「ハノイの子どもたちを救った」との感慨をもつ。68年の解放的な（著者は「反抗的」と表現している）雰囲気が伝わってくる作品だ。そう、本土のぼくらもそれと同種の、岩国基地をめぐる「スパイ活動」にかかわっていたことになる。

『ほびっと』には、福岡から来たアンドウとサワダがベトナムの戦場と直結する岩国基地の監視にはりついていたことが書かれているが、彼らのまとめたレポートも、拙著『私たちは、脱走ベトナム兵を越境させた……』に書いたとおり、パリの南ベトナム臨時革命政府代表のグエン・ティ・ビン氏に手渡していた。このもう一つの「スパイ活動」は、少なくとも戦争を早く終わらせるのに貢献したものと確信している。

ところで最近、高名な女性の俳優ジェーン・フォンダの自伝『わが半生』（２００５年）を英文で読む機会があった（邦訳もあるが、肝心な部分に誤訳あり）。兵士に反戦を訴えるため米本国と太平洋の基地を巡業した彼女を中心とするＦＴＡショーの章に、兵士の圧倒的な参加で盛りあがった岩国公演につき要旨次のような記述がある（前記掛川さんの文章は、この日、広島から岩国へバスで向かう途中、フォンダが「わたしの国がここに原爆をおとして、あんなに大勢の人を殺してしまったのよね」と言って、大粒の涙をぽろぽろこぼしたとの証言を伝えている）。

「数名の兵士とのインタビューを撮影した。持ち込まないという日米間の合意に反し、彼らは密かにまた非合法的に、絶えず核兵器を移動させられている。真実を明らかにしたい、と相談を受けた。」

日本側の調査とアメリカ側の証言はぴったり合致する。楢崎追及を政府は否定することしかできなかったが、事実は事実なのだ。これが71年11月（楢崎発言）から12月（ＦＴＡショー）にかけての出来事であることに注意を喚起したい。

☆密約と沖縄の核兵器

沖縄の核はどうだったかといえば、小説『カデナ』では、68年、つまり本土復帰前の沖縄に核兵器が貯蔵されていたことが自明の事実として語られている。北爆の最後に核を使うという噂さえ空軍兵士のあいだに流れていたという。

沖縄に関する限り、昨年12月23日付け朝刊各紙が一斉に報じた、佐藤栄作元首相の机から発見されたニクソン・佐藤の署名つき69年11月の密約本文――返還後の沖縄が「核抜き・本土並み」でないことを裏づけた文書だ――により、この事実は公式に確認された。密約は「沖縄に現存する核貯蔵施設の所在地である嘉手納・那覇・辺野古およびナイキ・ハーキュリーズ基地を

いつでも使用可能な状態で維持する」と明記している。普天間基地の「代替地」、辺野古の名があることも見逃せない。

この原文が明るみに出るまでの報道はどうだったか。だれが操作したのか、非核三原則にいう「持ち込み（introduction）」は「核搭載艦船の寄港」問題にすりかえられていた。通常イントロダクションとは「～の内側への持ち込み」を意味する語だ。「寄港」なら、今回の密約原文が「再持ち込み（re-entry）」と並記しているトランジット（通過）に近いだろう（事実「寄港」は「持ち込み」に当たらないとする60年密約の討議記録も、外務省で見つかっているという）。問題も用語もこみいっているが、念のため断ると、密約本文は、返還後も緊急事態には、再持ち込みと通過の権利を米国がもつことに合意している。

その上で、71年秋時点での本土岩国への核持ち込みをどう考えるか、これこそが問題の核心である。外務省の有識者委員会が密約問題を調査するのは結構だが、その作業が文書としての密約の後追いに終止するなら、不十分きわまる。沖縄返還後の71年に岩国で核が見つかったことで、一般に認識されている事態は根本的に変わったのだ。「核つき・本土沖縄等し並み」こそ、返還と核をめぐる 隠しようのない齟齬の真相であることが明らかになったわけで、ここには、まだ知られていない新たな密約が隠されている可能性も高い。

☆密約文書でなく、事実の検証をこそ

日本政府と米国はこの点への回答を迫られている。ぼくたち市民も、また当時取材したはずのメディアも、事実関係に立ってこの問題を検証し直すべきだろう。

運動側についていえば、引用したこと以外に、本土と沖縄の米軍解体運動の実情は、ジャテック機関紙『脱走兵通信』と後継紙『ジャテック通信』（いずれも『ベ平連ニュース縮刷版』所収）が逐一報道しているので参考になるはずだ。

「国民的」という形容詞がふさわしかった60年安保闘争から50年、否定しがたいこの事実を避けたままでは、日米友好条約の見通しが開かれないだけでなく、「対等な日米関係」の模索など絵に描いた餅だと思う。

最後に思い出を一つ。中川さんが「一人で岩国ベ平連をやっている」と書いたフクヤを、東京から初めて訪ねたのはたぶん筆者だったろう。彼の連絡先を教えてくれた人物がいたはずだが、思い出せない。行ってみると、フクヤのほかに仲間がいた。

クリス・カウリー夫妻だ。英国にもどったあと、カウリーは事故で急逝したが、日本人の妻があちらの生活にとけ込んで暮らしていたのを覚えている。そもそものはじめから、岩国での米軍解体運動が国際主義的な連帯のなかで進行していたことを書きとめておく。（2010・1・9）

（たかはし・たけとも、本誌編集委員）

【編集部注】

「ジャテック」とは、「反戦脱走米兵援助日本技術委員会（Japan Technical Committee for Assistance to U.S.Anti-War Deserters）」の英文からの略称。

【本文で取り上げた岩国と沖縄の新著】

中川六平『ほびっと　戦争をとめた喫茶店――ベ平連1970－1975 in イワクニ』講談社、2009年

池澤夏樹『カデナ』新潮社、2009年

【「ジャテック」についての参考文献】

ベ平連編集『ベ平連ニュース縮刷版』ほんコミニケート社、1974年

関谷滋・坂元良江編『となりに脱走兵がいた時代――ジャテック、ある市民運動の記録』思想の科学社、1998年

高橋武智『私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた……――ベ平連／ジャテック、最後の密出国作戦の回想』作品社、2007年

防衛省主導の軍備増強予算に異議あり！

――2010年度防衛予算案を批判する

杉原　浩司

▼新政権は「レビュー政権」たり得るか

「予算は政治である」と鳩山由紀夫首相が語っていたような気がする。格差と貧困が拡大するこの時代には、「血税」という表現が違和感なく当てはまる。税金の使い道を厳しく監視するのは、市民の権利であるばかりでなく、生き延びるための義務かもしれない。ここでは、2010年度政府予算案の防衛費（軍事費）のうち、兵器（装備品）関連にしぼって検証してみたい。

ちなみに、昨年末に閣議決定された軍事予算案の総額は、前年度比0・3％増の4兆7903億円。ただ、防衛省職員と自衛隊員計25万人分の子ども手当を除くと、4兆7668億円になり微減となる。海兵隊グアム移転費（472億円）を含む「米軍再編」経費は1077億円と前年に比べ大幅増額された。

鳩山政権は、当初、予算の「ゼロベースでの見直し」を掲げ、麻生政権下で作られた10年度予算概算要求の再提出を命じた。当然のことだろう。私は、新政権はまず何よりも「レビュー政権」たるべきだと思う。自民党政権が長期にわたり作り上げてきた政官業癒着の支配構造を解体し、新しい政治を作り出すためには、あらゆる制度、政策の「レビュー＝見直し」を行なうことが先決だと確信するからだ。その意味では、鳩山政権による「防衛計画の大綱」改定の1年先送りの決定には意味がある。

防衛省は、総額こそ抑制したものの、中身はほとんど変わらない出し直し概算要求を示した。目玉となる装備品は「ミサイル防衛（MD）」用の迎撃ミサイルPAC3の追加配備（北海道、東北、沖縄への）経費、大型ヘリ空母建造費、新戦車導入費などである。

鳩山政権は昨年11月、行政刷新会議による「事業仕分け」を大々的に行なった。防衛予算では、仕分けにより、国際平和協力センターの建設、自衛官の実員増、情報システム借料等が計上見送り・削減と判断された。さらに、当初は俎上に上らないと思われた「装備品の調達（10年度新規後年度負担）」が案件に含まれた。「後年度負担」とはローン払いのことで、高額な兵器が含まれる。

私は当日、インターネットの動画中継を見守った。財務省の市川健太主計官は、「現大綱の枠を超える装備品は、大綱見直しを待って戦略的観点から検討するべき」「大綱見直しや次期中期防（中期防衛力整備計画）を先取りするものの取得は見合わせ、新規後年度負担を厳しく抑制すべき」と主張し、装備の中身の是非以前に、防衛省の要求が「ルール違反」であると強調した。それ自体まっとうな主張だ。

これに対し、防衛省官僚は、予算要求が防衛省主導であると認めたうえで、「PAC3もSM3（注・迎撃ミサイル）も実験での命中精度は80％以上で、北朝鮮によるミサイル連射や核実験などを考えると弾道ミサイル対処能力の早期整備は必要」と根拠の怪しい反論をしてみせた。結局、統括役の枝野幸男議員が「仕分けになじまない」として「政治判断に委ねる」とのまとめを行った。

▼PAC3用改修は「閣議決定詐欺」

仕分け直前の11月24日、岡田克也外相がPAC3追加配備経費（944億円）の計上に異論を唱え、藤井裕久財務相（当時）も賛同したと報じられた。翌日には福島瑞

穂社民党党首（消費者相）も異論を表明した。久しぶりにMD経費が争点に浮上し、「政治判断」の行方に注目が集まった。

そして、12月17日、「平成22年度の防衛力整備等について」という文書が閣議と安全保障会議で決定された。これは、防衛大綱改定の先送りを受けての10年度防衛予算策定の基本指針である。ここでは「現大綱の考え方に基づき防衛力を整備する」「老朽化した装備の更新や旧式化しつつある現有装備の改修による有効利用」などの考え方が示された。焦点の「弾道ミサイル攻撃への対応」の項では、「現大綱に定める体制の下、（略）弾道ミサイル防衛にも使用し得る高射群について、弾道ミサイル対処能力の向上を図る。また、弾道ミサイル防衛能力を付加されていない高射群については、現有機能の維持に必要なシステム改修に取り組む」と記された。

私はこれを読み、「なんだ、PAC3対応型への改修はしないんだ」と安心してしまった。後者の「付加されていない高射群」とはPAC2、すなわち対航空機用の迎撃ミサイル部隊のことであり、その「現有機能の維持」とはPAC2能力の維持と読むしかないからである。

しかし、それは大きな間違いだった。この防衛省官僚による作文には、周到な仕掛け＝トリックが隠されていた。防衛省の説明によれば、カラクリはこうだ。現在のPAC2は「コンフィグ2」というバージョンだが、そのソフトウェアの米企業による性能保証が12年度に終了してしまい、部品もなくなる。PAC2の「現有機能の維持」には、「コンフィグ3」バージョンへの更新が必要だが、コンフィグ3への変更は4年国債で行なうので、10年度から改修を始めても整備が1年ずれ込むのだと。

ところが、コンフィグ3はMD用のPAC3対処能力を併せ持ち、ミサイルと発射機さえ追加すれば、PAC3に化けてしまうという仕掛けだ。防衛省はソフトウェアの保証が切れることがどれほど問題になるのかについて、説得力ある説明をしていないという。

結果的には、コンフィグ3への改修によって、PAC2が「現有機能の維持」を超えてPAC3対応型へと変質し、現大綱を超える機能強化をもたらす。これは、閣議決定文書からは到底導き出せない結論であり、「閣議決定詐欺」に等しい。しかも、この事実は世の中にほとんど知らされていない。予算案決定により、レーダーや射撃管制装置などのPAC3対応型への改修費として、639億円の巨費が計上されてしまった。

▼「大型ヘリ空母」導入の詭弁

さらに、予算計上の見送りも予想されていた大型ヘリ空母建造費（1208億円）も、新戦車導入費とともに結局入ってしまった。そもそも大型ヘリ空母とはどのようなものか。防衛省は「ヘリコプター搭載型護衛艦（22DDH）」と呼んでいる。全長248m、基準排水量1万9500トン。09年3月に就役したヘリ空母「ひゅうが（16DDH）」（全長197m、1万3950トン）を上回る海自史上最大の軍艦だ。そのサイズは第2次世界大戦時の米海軍の正規空母「エンタープライズ」に匹敵する。ヘリコプターを最大14機搭載でき、同時にヘリ5機の発着が可能。人員4000人、トラック50台を運べ、他艦への燃料給油も可能という。海自護衛艦「しらね」の後継艦とされるが、しらねが全長159m、5200トン、建造費約400億円だったのに比べて、基準排水量で4倍、建造費も3倍に達しており、能力面から見ても「後継」ではなく大幅な機能強化に他ならない。

建造の狙いは（1）中国海軍への対応、（2）海外派兵への対応とされており、前者について防衛省は、潜水艦の監視・捜索や遠距離からの水上艦の警戒のため、と説明。後者については、国内外の大規模災害への対応を強調し、「輸送艦と補給艦の機能を兼ね備えた」ため「予算の効率化にもつながる」と正当化している（09年10月27日、朝日）。

導入自体に賛成する論者からも、厳しい批判の声が挙がっている。『防衛破綻』（中

公新書ラクレ）著者の清谷信一氏は、「排水量だけを見ても、これをヘリコプター搭載護衛艦＝駆逐艦と呼ぶのはもはや詐欺」「22ＤＤＨはもはや多目的空母であり、政治的に困難だから護衛艦と称するというのは、納税者に対する背信行為である」と批判し、「政府が大綱で決めた護衛艦の数を海自が勝手に減らして、空母を調達するというのは、『軍隊』の独断専行あるいは『反乱』である」とまで言う。田岡俊次氏もかつて最初の「大型護衛艦」が計画された際、「これをＤＤ（駆逐艦）というのもこそくだ」と述べ、「かつて戦車を『特車』と呼んだのと似ている」（00年12月14日、朝日）と批判していた。

大型ヘリ空母導入の危険性はほとんど語られていない。元自衛艦隊司令官の山崎眞は推進の立場からこう述べる。「22ＤＤＨは約40年の使用が見込まれる。その生涯において、現在では想像もつかないような事態が生起することも考えられる」「22ＤＤＨがＳＴＯＶＬ（垂直離発着）機を搭載して、艦対防空を実施しつつ、シーレーン防衛を行う事態が今後起こらないとは誰も言えない」（『軍事研究』10年1月別冊「海上自衛隊の空母型護衛艦」）。垂直離発着機には最新鋭のＦ35戦闘機などが想定されている。

大型ヘリ空母の建造が、東アジアにおける海軍力の増強競争を加速させることは間違いない。中国が空母建造に入りつつあることは事実だが、「空母には空母を」という対応は軍需産業を喜ばせるだけだ。その受注には、ＩＨＩマリンユナイテッドや三菱重工、三井造船、ユニバーサル造船等がしのぎを削ると見られる。原子力空母ジョージ・ワシントンの横須賀母港化の見直しも含めて、現在起きている軍備増強の連鎖を断ち切るイニシアチブ（「東アジア軍縮会議」の呼びかけなど）こそが追求されるべきだ。

▼「軍縮計画の大綱」を

最後に、ほとんど注目されていないが「ＪＤＡＭ」というＧＰＳ誘導爆弾の継続購入についても取り上げておきたい。今回の予算案にはＦ２戦闘機35機分のＪＤＡＭ機能付加として、改修部品の集中調達経費が計上された。空自は石破茂防衛庁長官、田母神俊雄空幕装備部長時代の04年度予算から、その導入に舵を切った。ＪＤＡＭとは米軍がイラクやアフガニスタンで多用している先制攻撃兵器で、ＧＰＳ（全地球測位システム）により衛星誘導して標的を破壊するいわゆる「スマート爆弾」である。当然ながら「誤爆」等により多くの民間人を殺傷している。

「専守防衛」を建前とする日本が、こうした先制攻撃兵器を導入することは本来許されない。しかし、導入当時も今も、ほとんど問題にされていない。むしろ、推進派がその意義を強調している。石破は「画期的なことだ」（『日本の防衛７つの論点』別冊宝島Ｒｅａｌ）と語り、自ら導入の理屈（敵部隊が上陸した際に、正確に敵だけを攻撃する）を考え出したとする潮匡人（元三等空佐）も、「画期的な転換点」「『矛』を担う兵器として、決定的に重要」（『自衛隊はどこまで強いのか』講談社＋α新書）だと述べている。マスメディアや私たち自身の認識不足も反省しながら、こうした兵器予算の削除をも要求していくべきだろう。

私たちは2月5日（金）午後7時より、東京・富士見区民館で「市民による『事業仕分け』――２０１０年度防衛予算を斬る！」と題した企画を行う。ぜひ参加してほしい（本誌「インフォメーション」欄32ページ）。

予算審議を厳しく監視することに加えて、1年先送りされた「防衛大綱」改定に、「軍縮計画の大綱」を対置してゆくことも考えていきたい。本当に必要なのは、主権者への「政権交代」であり、税金の使い道の決定権は本来私たち納税者、市民の手にあるはずだ。軍縮へと舵を切る大きなチャンスを逃すのはもったいない。この1年は勝負どころだ。

（すぎはら・こうじ、核とミサイル防衛にＮＯ！キャンペーン）

＊参考までに：半田滋「防衛費で軍備増強のカラクリ」『週刊金曜日』10年1月15日号「金曜アンテナ」欄をご覧ください。

運動の現場から

葛飾マンションビラ弾圧事件、最高裁不当判決を糾弾する

大西 一平

2009年11月30日、最高裁第2小法廷（今井功裁判長）は、葛飾マンションビラ配布弾圧事件の裁判で、被告の荒川庸生さんに対し、罰金5万円を命じた高裁判決を維持する上告棄却という判決を下した。立川反戦ビラ配布弾圧事件の元被告として、この許しがたい不当判決を怒りをもって糾弾したい。

●立川反戦ビラ弾圧事件と連帯

葛飾マンションビラ弾圧事件は、立川反戦ビラ配布弾圧の1審での無罪判決が出たほぼ1週間後に起こった弾圧で、最初から警察や検察がビラまきを有罪とする判例を増やすために作り出した事件であると私たちは批判してきた。起訴した検察官も同じ、最高裁での裁判長も同じである。

5年に及ぶ裁判闘争では、お互いに連携し、弁護団の意見交換や共同での集会なども開催してきた。しかし、08年5月の私たちに対する有罪判決以降、判決だけは同じにならないでほしいと願ってきたが、ともに有罪にされてしまったことに怒りを禁じえない。

しかも、判決内容もほぼ同じ。集合住宅におけるビラ配布は、管理権者の意思に反すれば全て有罪という、乱暴極まるものだ。

私たちへの不当判決が利用されて今回葛飾裁判まで有罪とされてしまったことに、立川反戦ビラ裁判の元被告としては何とも申し訳ない気持ちだ。このような不当判決を絶対に認めないという声をともに大にしていくことで、これからも連帯していきたいと思う。被告、弁護団、支援の方々はじめ全ての関係者の皆さんのこれまでの闘いに敬意を表したい。

●立川裁判と葛飾裁判の違い

一方で、葛飾裁判では、官舎と民間マンションの違い、逮捕に至る経過の違い、建物の構造やビラの内容など、いくつかの相違がある。

私たちの最高裁判決以降、葛飾の弁護団は苦心して、立川の有罪判決から見ても葛飾のケースは無罪であることを、その違いを例証して主張してきた。立川と葛飾の最大の違いは、管理権者の管理権が不明確であることだ。葛飾判決は、管理組合が管理権者であり、ビラ禁止の掲示や組合の規約などを根拠に管理権者の意思は明確だと述べるが、実は弁護団が主張する通り、住民による管理組合への権限の委任の実態や、規約や掲示の内容の決定に際し住民総会があったかが不明であるなど、不明確な点が多い。これらの違いを全て排除して、最高裁は「管理者の意思に反して立ち入った」として有罪判決を下したのだ。

葛飾の弁護団は概略次のように主張し、反論した。すなわち、立川判決では、「管理者の意思に反する立ち入り」と断定するには、単なる「抽象的な管理権侵害」ではなく、具体的な管理権者と立ち入り拒絶意思の明確な認定が必要となるという考えから、最高裁判決としては異例の詳細な事実認定を行い、ビラの内容にまで踏み込んで（つまり管理者が自衛隊だから「反自衛隊的内容」であるという点を強調して）有罪を導いた。しかしながら葛飾の場合、それらの点が不明確、無根拠であるから有罪にはならない、と。

●立川裁判よりもひどい判決に批判を！

この主張は、私たちが民間マンションでのビラをまく上での武器になる主張だ。にもかかわらず、最高裁は単なる立川判決の繰り返しで有罪判決を下してしまったのである。

管理者が誰であろうとビラを受け取るか否かは住民が決めるものだ。個々の住民の意思を無視して管理者が決めていいはずは

ない。たとえ形式的な管理者がいたとしても、住民の意思が具体的に代表されていなければならない。

こういった当然の主張を無視した最高裁判決を、私たちは認める必要はない。立川よりもさらに悪化した最高裁判決を、私たちはもっと批判していかなければならない。

（おおにし・いっぺい、立川反戦ビラ弾圧事件元被告）

運動の現場から

とめよう9条改憲！

――大阪意見広告運動にご協力を

原田　恵子

2010年5月3日憲法記念日の「毎日新聞」大阪本社版朝刊への掲載（山口県西部を除く西日本全域）を目指し、3回目「とめよう9条改憲！大阪意見広告運動」が昨年11月3日からスタートした。参加費個人1000円、団体4000円。

今年は憲法問題にとっては重大な局面を迎える年である。5月18日から施行される改憲手続き法（07年5月に公布）との対抗である。この法律により、衆参両院の憲法審査会での審議、国会による改憲案の発議、改憲のための国民投票が可能になる。

昨年8月の衆議院選挙により「今にも改憲を」という自民党政権が倒れ、政権交代も実現した。不況下で経済対策に右往左往している今の国会の状況下で、すぐにも改憲案が3分の2の勢力を得て国民投票にかけられるということはありそうにない。しかし、鳩山由紀夫首相が新憲法制定議員同盟（会長中曽根康弘）の顧問であり、民主党には、実質改憲に賛成する準備ができている勢力が多数いる。反改憲運動の側は、表面化していない部分への注意喚起を怠ってはならない。改憲手続き法そのものを葬り去らなければならない。明文改憲の強行は無理をしなくても、日米安保体制や国連への協力の名のもとに、実質的な改憲行為が進められることは大いにあり得る。一瞬たりとも目を離せないのだ。

ノーベル平和賞の受賞スピーチで武力による平和を肯定したバラク・オバマ米大統領に代表されるように、日常的に戦時体制にあるアメリカと、憲法9条の精神を堅持し対話による平和を目指す日本とは国のあり方そのものが違う。その根幹部分から目を背け、アフガン情勢、ソマリア情勢、イラク・イランなど中東情勢に協力したり、米軍基地問題も住民の意思を尊重するとしながら明確な決定が出せない現状で、都合の良い解釈をしながら実質的な改憲行為を行なわせてはならない。今こそ、私たちの武力で平和はつくれないという強いメッセージをより多くの人の手によって示さなければならない。

昨年の5月6日、難病で苦しみながらも、病床から参加を呼びかけて広げようと頑張っていた友人が亡くなった。デモや集会に行けなくても自分の意志を表明できる唯一の運動だと言っていた。海外に住む友人も参加してくれた。彼女は結婚し海外で永住するにもかかわらず、息子が20歳になったとき、日本国籍を維持させるかどうかの選択を迫られた。熟慮の結果、日本国籍を維持させた。判断の基準に憲法9条があった。9条がある限り、息子が戦場に行くことはない。殺すことも殺されることもないだろうと思った。今生活している国には軍隊があり、戦死という悲劇を身近にみているからだ。せっかく息子のためにした選択が改憲などという無謀な行為で水泡と帰す

るなど許せないと怒りの声を表明するために参加した。万が一、9条改憲がなされたなら、息子には日本国籍を捨てさせるとも言っていた。生活維持のために積極的に活動できない人も、運動することに抵抗がある専業主婦の人も、子どもの未来が平和であって欲しいとの願いをこめて5月3日に声をあげてくれた。

大阪意見広告運動は、それぞれの思いを大切につくりあげてきた。昨年は、新聞5段の意見広告であったが、今年は全面広告目指して、1段でも多く増やしていきたい。関西、西日本以外の方からも今年以上のご支援をいただきたい。

■申し込み・送金は、2010年4月9日まで（過ぎると名前の掲載が不可能です）
■振込先：00-00990-9-84650　とめよう9条改憲！大阪意見広告運動／連絡先：中北法律事務所（〒530-0047 大阪市北区西天満4-8-2北ビル本館501号　TEL06-6364-0123）
■問い合わせ先：市民共同オフィスSORA（〒540-0038 大阪市中央区内淡路町1-3-11シティコープ上町402号　TEL06-7777-4935　FAX06-7777-4925）

（はらだ・けいこ、とめよう9条改憲！大阪意見広告運動事務局）

運動の現場から

伝えたい想い

――レイプクライシス・サバイバーズネット関西の活動から

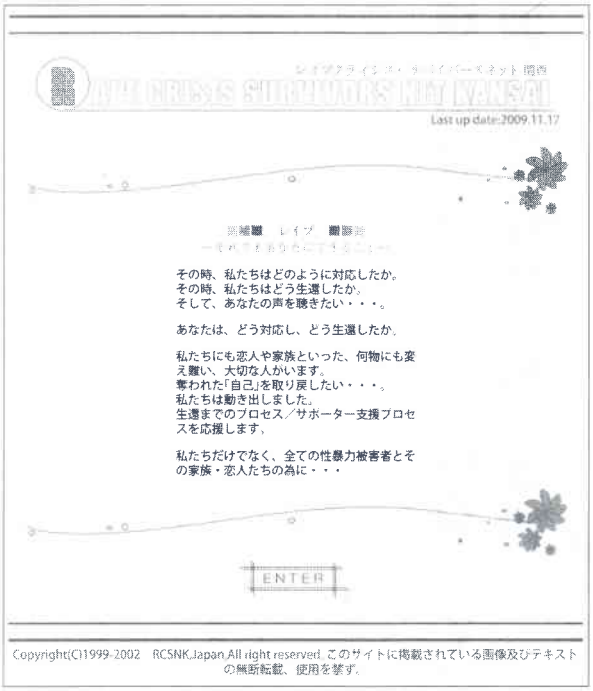
岡田　実穂

1998年、身近で起きた2件の事件をきっかけに私たちの団体は動き出しました。

当時の性暴力被害者を取り巻く環境は現在の状態から見ると実に稚拙なものでした。被害に遭った時どこに駆け込めばいいのか、相談機関はあったのかもしれないけれども一般に周知されておらず、警察のウーマンラインも現在の規模からはかけ離れたものであったと思います。対応面でも性暴力被害に特化したトレーニングを受けた人は少なく、被害を訴えるということは「二次被害を覚悟する事」という側面がありました。どうにか被害者をサポートするために、友人たちでチームを組んで勉強しながら、警察や弁護士を含め自分たちがトレーニングしながら関わらなければならない。しかもその間に当事者は被害後の様ざまな症状を起こし心理面でのサポートも必要になります。本当に必死になりながら道を模索し続けたというのが、活動を始めるきっかけとなった事件でした。

とにかく情報が少なかったのです。性暴力被害とは何なのか、どういった症状が出ることがあるのか、周囲の人間は何ができるのか、インターネットでも「レイプ」と検索すればAV関係の情報しか出ず、まずは情報を集め1人でも多くの人に対してこの現実を知って欲しいという思いでHPを開設しました。必要と思われる情報を集め、当事者に対して「あなたは悪くない」「あなたは1人じゃない」というメッセージを伝えたかったのです。

また、アメリカの被害者支援関係のNP



レイプクライシス・サバイバーズネット関西のホームページ

Oで実践されてきた24時間態勢のホットラインやサポートトレーニング等に学んでプログラムを作り、サポーターの養成や身近な人びとにもできるサポートスキルについての講座運営もしてきました。

現在は、2006年から2年ほどの活動休止を経て09年10月より新体制による活動を再開しました。HPも当事者にとってより利便性の高い情報を発信するためにも、ドメイン取得から始め情報収集チームの始動、そして性に関わる様ざまなネットワークと連携を作りながら改編していこうとしています。昨年からブログも開設したのですが、そこでのアクセス解析を見るとやはり「レイプされた」「性暴力被害にあったら」「性暴力被害者支援」といったキーワードでブログに訪れる人が多いことがわかってきました。こうした方が必要としている情報を少しでも多く発信していければと思っています。組織としては事務局兼代表、全体顧問兼プログラムトレーナー、また新たに心理職のスタッフを迎え、ボランティア会員として登録していただいた方が5名程という小さな組織ですが、これから多くの方がたと繋がりあえることを願っています。ぜひご支援ください。

性暴力被害というのは特定の人間にのみ起こるものではありません。男女、そして年齢も問わず全ての人が被害に遭うリスクのある犯罪です。被害経験のある人はあなたの隣にもいるかもしれないのだから、1人でも多くの人にその現状を知ってほしいし、そのために多くの人と繋がりあえたらと思っています。もちろん予防啓発は重要ですが、私たちは被害に遭った人に対して、とにかく1人じゃない、何があっても絶対にあなたは悪くないんだと伝えたい。悲しんでもいいし、怒ってもいい、何があってもこれからも共に、人生を歩んでいきましょうと伝えたいのです。

○ホームページ：http://www.rcsnk.com
○お問い合わせメールアドレス：info@rcsnk.com
○会費・寄付窓口：郵便振替口座　00930-8-256336 レイプクライシス・サバイバーズネット関西

（おかだ・みほ、レイプクライシス・サバイバーズネット関西・代表）

運動の現場から

絵葉書『沖縄・辺野古〝生きている〟って、伝えたい』の遅ればせながらのご案内

山本　英夫

鳩山政権が発足し、普天間基地の移設先がどうなるのかが政治焦点に浮上しています。マスコミにも「普天間」「辺野古」などの固有名詞が飛び交っていますが、「日米同盟」を固持（誇示）したいらしい。情けない！

まぁ、私が昨年の8月末に完成させたこの絵葉書『沖縄・辺野古〝生きている〟って、伝えたい』（9枚組、500円）は、そんな風向きの中で幸か不幸か、東京新聞や、朝日新聞にも紹介されました。小さな紙面とは言え、辺野古への基地建設反対のメッセージを載せて頂いたのですもの、感謝しています。

このタイミングは単なる偶然。私はアセス終了後を見据えて、県知事の公有水面埋立法の埋立許諾に抗するために作成しました。「こんなすばらしい自然を壊して、基地かよ！」というメッセージを少しでも多くの人に知って頂きたいからです。

私を少々ご存知の方は、反戦・反派兵の運動やら撮影をやっていると思われているかもしれません。しかし私の出発点は、東京オリンピック（1964年です）を前後する時代の中で急速に失われていく自然に気づき、〝生きもの〟たる人間の生命の危機を感じたことでした。そして67年東京湾の埋め立てが進む中、日本列島最大（当時）の野鳥の渡来生息地だった江戸川河口（「新浜」）を救おうと、立ち上がったのです。

しかしそこに立ち塞がったのが、地元の漁民・農民達。彼らが立てた「野鳥を殺せ！」の看板に、私は大ショックを受けました。それから40年の歳月が流れ「環境」だとか「エコ」などの言葉が流布しています。しかしひと皮むけば、例えば、辺野古では漁民が事業者側の立場からアセスメント調査船を出す構図。変わらん…。

まぁ、冷静に考えれば、漁民として食えない「現実」があれば、先ずは金になる仕事をと考えることを誰が笑えましょう。

新自由主義を加速した政治・社会の中で、世界的に貧富の格差が広がり、人びとは村から都市に流入。貧しくされている人びとを押さえつけているのが「対テロ戦争」であり、「軍事力による安全保障」（「日米同盟」）です。だとすれば私は、漁民（うみんちゅう）との連帯を模索し、〝自然と共に生きる〟を根っこに据えたいのです。

私の40年余りに互（わた）る軌跡をポンと一言で言いましたが、こうしたことに改めて気づかせてくれた辺野古・大浦湾の自然とそこで闘い抜いている人達に心底から私は敬意を表します。だからこの絵葉書は単なる「辺野古を守ろう」の宣伝物ではありません。私の感謝と怒りと平安を求める魂が込められています。生きものたち（人間も）と、生きものの起源であり、生きるための必須条件である水を1枚1枚の中に撮り込みました。

ついでに言えば、「沖縄＝リゾート」の図式にも私は与（くみ）しません。「リゾート色」を演出したかのような「沖縄」なんて写真もクソ食らえ！

なお、9枚の写真は辺野古浜と辺野古川河口で撮影したもののみで、うち4枚は闘いの軌跡も写し込まれています。この陸域からサンゴ礁の海を想像してください。

あなたのご注文を切にお待ちしています。

（やまもと・ひでお、フォトグラファー）

▼FAX＆TEL03-5996-0779　山本へ。ご住所、お名前、電話番号を明記しFAXしてください。お支払いは郵便振替用紙を同封しますので、そこへ。（送料4部まで80円、8部まで160円。9部以上送料当方負担）

◆山本英夫写真展「FUTENMA」の開催。日時：2010年4月13日～18日。詳細未定。続報をお待ち下さい。

Information　P.32からの続き

【東京】3月29日（月）16ミリフィルム上映と講演「日米安保50年を考える」 ●会場：麻布区民センター（地下鉄「六本木」駅徒歩10分）　●時間：18:15～　●主催：みなと・9条の会　TEL03-3586-3651

【東京】3月20日（土）オルタキャンパス「OPEN」「ジェンダーとセクシュアリティ――婚姻血縁家族制度と生産中心主義を離れて」 青山薫（ピープルズ・プラン研究所共同代表）（日程変更の可能性あり）　●会場：ピープルズ・プラン研究所（地下鉄有楽町線「江戸川橋」駅徒歩5分）　●時間：14:00～　●参加費：1200円、ビンボな人800円（自己申告）　●主催：ピープルズ・プラン研究所　TEL03-6424-5748、FAX03-6424-5749

平和と非暴力を世界に呼びかける ワールドマーチ

太田 夏子・佐藤 真喜子

ワールドマーチは、ヒューマニストムーブメントが推進するNGOのWorld without Wars and without Violence（NGO「戦争と暴力のない世界」以下WWW）という、平和主義と非暴力の分野で過去15年間行動している国際的な非政府組織により企画された、平和と非暴力を呼びかける「世界行脚」の行動です。

昨2009年10月2日、「国際非暴力の日」と国連が宣言したガンジー生誕記念日に、ニュージーランドを出発して世界中を駆け回った後、今年2010年1月2日にアルゼンチンのアンデス（アコンカグアにあるプンタ・デ・ヴァカス）で終了した、3カ月間に及ぶ平和運動の旅でした。熱帯と砂漠の灼熱の夏からシベリアの冬に至るまで、あらゆる気候と季節を通り過ぎるこの旅を行なったベースチームは、異なる国籍の約30人の人たちから成り、さらに広い地域をカバーするため途中でサブチームに分散し、再合流したり、またある地域をカバーするため別のベースチームが構成されたりと、大変複雑な構成と旅程でした。無事終了したマーチの全過程は映像とブログで記録されていますので是非ご覧ください（ワールドマーチ・ウェブサイト http://www.theworldmarch.org/ 及び http://blog.theworldmarch.org/es）。

ここでは、ワールドマーチの精神と、日本通過の数日間について紹介し、今後の展望をお知らせしたいと思います。

■世界市民が一つになって表明するために

ワールドマーチの最終目的は、今、私たちをますます核戦争へと導きつつある世界の危機に満ちた状況に対し、それを終わらせるために、平和を欲する世界市民の大半が声をあげることです。

私たち世界の平和的市民の大半は、軍拡競争に反対しながらも、ひとつにまとまった意思表示をしていません。それどころか、力を持った少数の人びとによる私たちへの支配が強化されつつあり、その被害を被っています。一緒に立ち上がって、軍拡競争に対する私たちの反対を表明することが今すぐ必要であるとの世界的な自覚を生むことが、何より必要です。

この運動の目標は、①世界中の核兵器の廃絶、②占領されている領土からの侵略軍隊の即時撤退、③在来兵器の比例漸進的削減、④国家間での非侵略協定締結、⑤紛争を解決する方法としての戦争を各国政府が放棄することの5つです。そしてさらに、戦争以外の形（経済的、人種的、性的、宗教的）を取ってそれを振るう者に隠されたり偽装されたりしている暴力を明るみに出すこと、そしてそのような暴力を受けているすべての人たちに彼らの被害について世界に知らせる方法を与えること、の2点も加わりました。

■世界で繰り広げられた多様なイベント

ワールドマーチは、あらゆる人により生み出されかたちづくられるべきもので、同じ志と感受性を持つ、どんな個人、団体、集団、グループ、政党、会社に対しても開かれるものです。その結果、各国の通過各地点で、地元の多くの人びとが様ざまな活動を合流させ、自分たちの創造性をこのマーチに結集することができました。このマーチには、想像力が生み出すことができる全てを受け容れるゆとりがあり、これは人びとによる、人びとのためのマーチであり、世界のほとんどの人たちに届ける希望がこもった運動です。

同時に私たちは、独立系メディアや著名人に、平和と非暴力の目的のためこのマーチを世界に広めるようお願いしました（支持者やグループに関しては、ウェブページをご覧ください）。そういった効果もあって、マーチが訪れるあらゆる市で、地元の個人やグループが地元マーチ、フォーラムや会合、フェスティバル、会議その他様ざまなイベント（スポーツ、文化、音楽、美術、教育など）が、彼ら・彼女ら自身の創造的イニシアチブによって組織化され実行に移されました。

また、後述するように日本通過の際には、09年10月17日に広島で平和市長会議事務局長から、ワールドマーチ総責任者ラファエル・デ・ラ・ルビアさんへ、広島・長崎議定書が手渡されました。これはマーチの通過する国々に議定書の支持を求めるためです。その後11月11日ベルリンでの第10回ノーベル平和賞サミットで、ノーベル平和賞受賞者グループより、彼らの非暴力憲章を委託されました。

10月17日広島で核兵器廃絶を求める「ヒロシマ・ナガサキ議定書」委託される

■マーチの成果を出すのはこれから！

マーチが終了した今、さらにその成果をはぐくむことが、各通過地の人びとの大きな課題です。大きなデモンストレーションとしてのマーチが引き起こしたエネルギーを生かして、具体的な非暴力運動活動のプロジェクトを計画し、ますますこの非暴力運動を世界文化として根を張らせるのが目的です。

すでに世界中で、多種多様なプロジェクトが様ざまな個人や組織により始められているほか、ヒューマニスト・ムーブメントも、NGO-World without Wars and without Violence のほか、Humanist Party International（政治関連）、World Center for Humanist Studies（アカデミズム関連）、Convergence of Cultures（文化関連）、The Community for Human Development（社会生活関連）など、あらゆる面での平和と非暴力推進活動と研究が進められています。

ピースマーチ通過地域と通過国は、オセアニア・アジア計9カ国・地域、欧州・東欧計26カ国・地域、中近東・アフリカ計12カ国・地域、北米・中米・南米計18カ国・地域の、総計65カ国・地域です。受け入れ態勢を整える現地の団体やオーガナイザーが見つからなかった国は通過ができませんでしたが、パレスチナとイスラエルの両方を訪れたり、韓国で非武装地帯付近まで足を運んだりと、意欲的な活動を行いました。

ローマ法王、ダライ・ラマ、イスラムの宗教学者、先住民族の長老、いくつかの国の国家元首や元元首、上院議員や地方議会議員、ノーベル平和賞受賞者などとの会合は大きなハイライトでしたが、マーチャー（マーチのコアメンバー）の記憶に残る主役はあくまでも現地の市民たちでした。同行した通訳兼務のイギリス人がマーチ通過の思い出を書いたブログがこちらにありますのでご覧ください（http://www.anatakara.com/petition/the-world-marach-review-by-tony-robinson.html）。

■日本でのワールドマーチの通過

日本でのワールドマーチは、韓国に別チームを残して、09年10月17日に代表を含むチームが福岡から入国しました。地元の市民団体と若干の報道機関に迎えられたあと、先に述べたように広島市の市民イベントの場で広島・長崎議定書を託されました。

夕方、平和記念公園の市民イベントで米国在住のヒバクシャに偶然会い、その願いを伝える決意を強くしたものです。

翌18日には京都での反戦・反貧困・反格差の集会に参加し、「ヒーローのように迎えられ」（マーチャーの感想）、夕暮れの京都市内を800名ほどの市民の先頭に立って

10月18日、「反戦・反貧困・反格差」の円山集会後のデモ行進で

行進しました。

19日は、東京で外務省軍縮課を表敬訪問して核廃絶への日本政府への取り組みについて聞き、ワールドマーチ宣言書と訪問承諾をした鳩山首相への返礼書を提出。その後東京タワーから見た夕闇に浮かぶ富士山に一同感激し、夜は地元のNGOや平和運動グループ主催により、歌手の原田真二さんのボランティア演奏や山田征さんのトークを含む音楽と文化の集いを、若者を中心とする100名ほどの市民と共に楽しみました。そして20日、米・ゲイツ国防長官の初来日の日に私たちは羽田から韓国に戻り、合流して翌日ロシアへと向かいました。ゲイツ国防長官とワールドマーチ、この両者が日本に求めたことは全く正反対のことでした。はからずも二つの異なる世界観が、東京の空で交差したわけです。

外務省では、文書で日本の過半数の国民の意志に沿って憲法9条を守ることを求め、また口頭で、外国の駐留軍（米軍）を取り除くよう日本政府に要請しました。これは、私が予期しなかった、日本市民の平和運動へのラファエル（マーチの総責任者）の援護と思われました。それ以前より私は、このワールドマーチがシンボリックなイベント的性格だけではない、考え抜かれた戦略的な面を持つと思い始めていたのですが、日本通過後のマーチを見て、なおさらそう考えるようになりました。

■ワールドマーチが持つ現実主義的戦略

イニシアチブを取った団体名のワールド・ウィズアウト・ウォーズ（WwW）という名前が示すように、この運動は明確に「戦争のない世界は可能だ」との強いメッセージを各地で発信しましたが、それは9・11世界貿易センタービル攻撃後の世界にあって、理想主義からではなく、むしろ現実主義に基づく世界観であると思います。またそれは先に記した5つの目標を同時に達成すれば限りなく近づく世界なはずですが、その一つの目標のためすら大国は自ら動かない、それならば市民が動かそう、という強い決意がこの運動の動機としてあります。

特に、占領地からの即時撤退と通常兵器の比例漸進的削減は、困難ながらも現在の世界状況では避けることのできない問題提言です。ワールドマーチの開始に際しニュージーランドの先住民、モリオーリ族の祝福を受けたことに象徴されるように、大国が先住民族の土地を収奪して軍事基地にしている現状、またガザ包囲を続けるイスラエルの非人道的不法行為に先進諸国が沈黙・協力する現状を、ワールドマーチは、核兵器同様、平和を求める世界が解決すべき大きな脅威とみなします。

さらに、アフリカや南米に拡大する米国のミサイル防衛および米軍世界的再編を伴う米国の軍事戦略が、核兵器削減交渉を阻害するだけでなく、それ自体世界を緊張・対立させるものであるとみなします。チェコのMD（米国の欧州ミサイル防衛）レーダー反対運動に、ヒューマニスト・ムーブメントを含む全ヨーロッパ的な市民運動の支援があったことからも、それはわかります。だからこそ、こういった軍事状況が与える世界的危機が、5つの提言のうちに核兵器と同列視されているのでしょう。

なお、ミサイル防衛については、最近プーチン元ロシア大統領が、米国のミサイル防衛が核兵器削減交渉を阻害すると語ったことからも、核兵器廃絶を願う日本の平和運動にとって米国ミサイル問題は優先議題であり、各種市民運動の横断的連帯力が問われる課題であるように思われます。

■ワールドマーチの方法論と今後

とは言え、ワールドマーチはオープンでわかりやすく人目を引く形式にこだわりま

した。一部の国家元首と元元首、著名な文化人、セレブ芸能人が当初から賛同して参加を呼びかけ、情報伝達は既成メディアに頼らず、各国ボランティアによるネット配信を用いました。寄付には上限を課し、運動への束縛を受けないようにしました。差異にこだわらず、平和と非暴力への賛同という共通性を重視し、理念としてガンジーの思想をシンボルに、8月に採取したヒロシマ・ナガサキの火を主要各地で着火し、権威および共通目標としてノーベル平和賞受賞者の提言と平和市長会議のそれを用い、ヒバクシャのメッセージによりマーチ後半の人心をつかむことができたと思います。

ですが何よりも、「未来への架け橋」の標語と共にあらゆる暴力への反対を主唱し、子どもを含む若者、身体・知的障がい者、同性愛者たちが誇らしくマーチに参加し、精彩を与えたことは特筆に値するでしょう。

11月11日ベルリンで「非暴力世界憲章」を委託される。ヒロシマ・ナガサキの火を点火

内戦の長い歴史があるスペインに始まり、その移民国家である南米各国で最高潮に達したワールドマーチを、南米に希望があると最期に述べた故小田実氏が見たら喜んだのではないかと思いました。

市民運動がグローバル化しなければならないほどの、現在の平和への脅威と、この運動を報道しなかった先進諸国のジャーナリズムの危機を提示しながら、平和と非暴力を願う人なら誰もが参加できる、目に見える世界的連帯としてのワールドマーチは無事終了し、次いで5月のNPT（核兵器不拡散条約）見直し会議の局面に移ります。

（おおた・なつこ、WWWメンバー、スペイン在住、さとう・まきこ、ワールドマーチ日本通過時オーガナイザー）

政権交代のチャンスを活かし、憲法9条・25条実現を 2・20 講演会

いまこそ普天間基地の閉鎖を！ 辺野古新基地づくり反対！ 税金を軍事費につかうのは、もう、ごめんだ！

憲法9条の実現をめざす私たちは、普天間基地を辺野古に「移設」するといういわゆる「日米合意」は、13年にわたる沖縄県民の根強い反対と総選挙で示された民意を尊重し、いったん白紙に戻されるべきだと考えます。

また、私たちの最低限の暮らしを保証するはずの憲法25条も長らくないがしろにされ、政権交代で税金のムダ使いにはようやくメスが入り始めたとはいえ、生活の格差は広がるばかりです。

この問題について、長く問題提起をされてきたおふたりにお話を伺い、これからの行動について皆で考えましょう。あなたのご参加をお待ちしています。

憲法9条・25条実現　講演会

（市民意見広告運動、市民の意見30の会・東京　共催）

日　時　2010年2月20日（土）
午後2：30開演（2:00開場）

会　場　西片町教会（東大前駅1番出口から徒歩5分、下記の地図を参照）

参加費　800円

講　演　新崎盛暉さん（沖縄平和市民連絡会代表世話人）
「普天間問題の原点は何か」
浦野広明さん（立正大学教授）
「憲法・税金・軍事費・貧困」

連絡先
市民意見広告運動、市民の意見30の会・東京
〒151－0051 渋谷区千駄ヶ谷4－29－12－305
電話／FAX　03－3423－0266、03－3423－0185
E-mail　info@ikenkoukoku.jp
HP　http://www.ikenkoukoku.jp/

2010年5月3日（憲法記念日）の全国紙・地方紙に、
意見広告「非武装・不戦の憲法を変えさせない」「人間らしく生きたい」を掲載しましょう。

連載エッセイ・第15回

鏡餅完売

鈴木一誌

新宿のヨドバシカメラによく行く。この店のファンだと言ってもよいだろう。同じような人は写真家にも多く、彼らに言わせると、ヨドバシカメラには、ときおりどうしても必要となる品物をしっかりと置いてあるらしい。売れ筋ばかりを揃える他の量販店とは一線を画しているのだろう。

ヨドバシカメラに通いだしたのはかなり古い。高校生だったか大学に入りたてのころか、一眼レフカメラを買いに行ったときからだから、40年ほど経つことになる。名前の通り、淀橋浄水場のすぐそばの、たしか木造かモルタルの2階屋だったか。商品が展示されているわけではなく、木製のカウンターがあるだけだった。希望の商品名を告げると、店員が背後の棚からカメラやレンズを取りだす方式だったと思う。商店というよりは、問屋の雰囲気だった。じっさい、小売店分の利益をカットして安く売っていたのだろう。値切るにしても、プロの一員になった気がして緊張した。背伸びして、知識を詰めこんで購買におもむいたものだ。カメラを1台買うのは、特別なイベントだった。

以来、パトロールと称して、新宿に用事があるたびに、カメラ売場を中心に新製品のチェックにいそしんでいる。わたしの周りには、中古カメラ、古書、レコード、双六、切手など、自主的にそれらのパトロールを買って出る友人がなにかと多い。それはともかく、そうこうしているうちに、小さな店舗がここまで大きくなったというわけだ。

最近では、売り場ではなく、修理コーナーによく行く。趣味というよりは、実用に迫られてだが、持ち運べる故障品をいそいそとヨドバシカメラに持っていく。修理コーナーで自分の順番を待ちながら、ほかの客が修繕に持ちこんでくる品物を眺めていると、じつにさまざまで見飽きない。壊れたパソコンのデータを何とかしてほしいと訴えるひと、そんなに古びたものをまだ直すのかと思ってしまうような、おそらくは生活に馴染みきったラジカセを取りだす人間もいる。炊飯器のばあい、なかにはまだ白飯が入っているのではないかと感じるくらい、生なましい。

修理コーナーのすぐ横では、真新しい製品を売っているのだが、商品が買われ、一度でも使用されたとたん、その品物は、使用者に属した極めて〈ワタシ〉的な物体に変貌する気がする。使っている人間の気配が立ちこめるのだ。万人に向かって買われようとしている新品と、人格化した修理品とが、道を隔てて隣りあっている。

年末のある日、百円ショップの前を歩いていて、店頭で奇妙な文字列に出会った。「鏡餅完売」。百円ショップと鏡餅の関係が、ちょっとシュールで、一瞬、意味がわからなかった。数秒後、理解する。そうか、いまは、百円ショップで鏡餅を買う時代なのだ。感慨は、単純ではない。供え物まで少しでも安く買おうとするひとびとへの感嘆と、百円ショップで買ってまで年越しの慣習を守ろうとする現象への驚きとを、同時に感じる。百円の鏡餅なら省略してもよい、とはならないのだ。

〈ワタシ〉化された商品の集積が、そのままでは見えない〈ワタシ〉を、自分に対しても、また他者に対しても可視化させる。だが、百円ショップの鏡餅は、それが中国などの外国製であることをふくめて、一体化する世界経済の露頭でありつつ、日本人の心性にも触れており、頭での理解を超えた闇を感じさせる。それは、〈ワタシ〉のもつ深淵かもしれない。

（すずき・ひとし、グラフィック・デザイナー、題字デザインも筆者）

市民意見広告運動事務局から

葛西　則義

9期の市民意見広告運動の新しい広告チラシが出来ました。

スローガンは「9条・25条の実現を」、サブスローガンは「子どもたちに平和で安心できる未来を約束するのは、私たちの責任です」というものです。この新しいチラシを、全国の賛同者の方がたに昨年10月末に発送いたしました。また同時にホームページをリニューアルしました。皆さま、ぜひご覧下さい。

さて、昨2009年総選挙の結果、9月16日に鳩山政権が誕生し、12月末で3カ月半が経過しました。

私たちがこの政権に要望することは、

1　対米追随路線からの脱却

2　一人ひとりを大切にする政治、です。

●「対米追随路線からの脱却」（9条実現）

民主党は選挙公約で、対等な日米関係を掲げました。しかし軍事国家アメリカと対等な関係になることは、日本の軍事国家への歩みを強化することになりかねません。したがって私たちが望むのは、このような「対等な日米関係」ではなく、今日まで続いてきた対米追随路線から脱却して、世界に誇るべき憲法9条を実現し、これを基に、世界平和に貢献することです。私たちは憲法9条の精神に基づき、沖縄の普天間基地を即時閉鎖し、辺野古新基地建設を撤回することを求めます。また、インド洋での給油を速やかに停止し、ソマリア沖から自衛隊を撤退させることを要求します。あらゆる解釈改憲を許さず、憲法9条を実現しましょう。

●「一人ひとりを大切にする政治を」（25条実現）

自公政権が進めた新自由主義は、大企業、官僚、大金持ち、大マスコミ等の権力者・団体が、派遣法に見られるように、勝手にルールを変更し、人びとを部品のように扱って来たことで、貧困・格差社会を生じさせました。

今こそ憲法前文および25条が保証している誰もが人間らしく生きられる社会になるように、どうしても必要な公共投資と選挙公約に掲げた「子育て・教育費用の低減」「中小企業向けの減税」「製造現場への派遣の禁止」「最低賃金の引き上げ」等の政策を早期に実施し、一人ひとりにお金が回るようにすることを要求しましょう。

私たちは、民主・社民・国民新党連立政権が、憲法の原点に立ち返って、本当に私たち一人ひとりを人間として扱う政治を実践していくかどうかを、厳しく見張っていく必要があります。そのために、9期の市民意見広告運動も、2010年5月3日憲法記念日に「憲法9条・25条の実現」の意見広告を掲載したいと思います。

皆さまのご支援・ご賛同をよろしくお願い申し上げます。

■講演会のお知らせ■

9期の意見広告運動の一環として、市民意見広告運動、市民の意見30の会・東京の共催で左記の講演会を実施します。

◎タイトル『**政権交代のチャンスを活かし、憲法9条・25条実現を**』

◎サブタイトル「いまこそ普天間基地の閉鎖を！　辺野古新基地づくり反対！　税金を軍事費につかうのは、もう、ごめんだ！」

○日時：2010年2月20日（土）
午後2時30分開演（2時開場）

○会場：西片町教会（南北線「東大前」駅徒歩5分）　住所：〒113-0024 東京都文京区西片2－18－18

○参加費：800円

講師には、沖縄から**新崎盛暉さん**（沖縄

平和市民連絡会代表世話人）をお迎えし、「普天間問題の原点は何か」と題して基地および日米安保問題について、また、**浦野広明さん**（立正大学教授）には、「憲法・税金・軍事費・貧困」と題して憲法の見地から見た税金・軍事費・貧困の問題についてお話を頂きます。お2人の講演に耳を傾け、これからの行動についてごいっしょに考えましょう。ご参加をお待ちしています（25ページに案内）。

■ホームページについて■

この数年間の市民意見広告運動・ホームページ（HP）への訪問数が、毎月2000程度であまり変化がありません。新しい訪問者が増えていないのでしょう。

HPの開設の目的は、意見広告運動の時々刻々の情報を賛同者の方がたに伝えることと、反戦・平和への私たちの思いを伝えることの2つでした。更なる賛同者の拡大をめざすには私たちの思いを伝えるといった面を強化した情報発信が必要と考えています。

なお、イベントのご案内では、

＊ こんなイベントがあります

＊ 行ってきました

＊ スタッフの声

等のコーナーで、私たちの日常の活動を含め、随時情報を更新しています。ぜひ、意見広告運動のHPをご覧ください。

9期のスタートにあたり、呼び掛け賛同人の方がたからお寄せいただいたメッセージは、HPに掲載しましたが、そのいくつかをご紹介します。

◇**奥石　勇さん**

日本国憲法は、世界に向けた平和実現へのメッセージです。日本国憲法は、「攻撃されるかも知れない」不安根絶の方法をも提供しています。世界の宝です。

◇**鎌田　慧さん**

派兵などなし崩し改憲にもっと強く抵抗しましょう。

◇**澤地久枝さん**

日本が世界の「平和の礎石」になる方向へ政治を押しすすめたい。

◇**平良　修さん**

民主党政権を、期待をもって強く見張る。その大切な役目を沖縄は自らの存在をかけて負います。

◇**西尾市郎さん**

辺野古新基地はつくらせない。危険な普天間基地は即時閉鎖する。その方向で、09・9・9（三重苦）合意を支持します。

◇**松浦悟郎さん**

9条をしっかり携えて人類共通の願いである平和の実現のために行動しましょう。

◇**山口幸夫さん**

持続していることが、人びとの心の中におりのようにたまって、やがて大きな作用をすると思います。

◇**金沢反戦市民社**

アフガンはアフガン人の手に。日本軍をはじめ、列強国によるソマリア沖軍事行動及び海賊行為を直ちに止めよ（ソマリアの人質収入100億円、他国の海賊行為による漁獲高400億円、どちらが海賊か）。

◇**被爆二世の会**

憲法9条を活かし、平和的生存権を実現しよう！

◇**不戦のネットワーク**

過大な期待はできないものの、民主党政権になり、私たちのめざす方向が1歩でも前進するよう頑張りたいと思います。意見広告運動がさらに広がることを期待します。

9期の意見広告運動をぜひとも成功させましょう。お申し込みは毎年締切間際に殺到しますが、今年は是非お早めに応募していただけると助かります。また、全国の地域で、独自の意見広告運動を起こしませんか。よろしくお願いいたします。

連絡先：市民意見広告運動事務局
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4－29－12～305
TEL&FAX：03-3423-0266　03-3423-0815
（かさい・のりよし、市民意見広告運動事務局）

服部良一衆院議員の話を聞く会

「普天間問題」をめぐる攻防の現状

―12月16日読者懇談会の報告―

昨2009年12月16日に、『市民の意見』読者懇談会の一環として、新しい反安保行動をつくる実行委員会との共催で、「服部良一衆院議員の話を聞く会」を開いた。本誌117号にも一文を寄せられている服部さんは大阪の中小企業での労働運動、沖縄と共に闘うことをメインテーマの一つとする市民運動に長年携わってきた方であり、私も以前から知っていた。その服部さんが、2007年7月参院選で大阪選挙区から社民党公認で立候補して落選したが、初当選した山内徳信参院議員の秘書として上京。その間、忙しい活動の時間を割いて反安保実の定例会議にも出席し、国会内の動きについて話していただいたことが何回かある。

服部さんは、今回の総選挙で社民党近畿比例ブロックから出馬し、当選をかちとった。沖縄の米軍基地問題が大きな焦点となっている今、服部さんが衆院議員になったことは市民運動にとっても大きな力となっている。おりしも「会」の前日の12月15日には、鳩山政権の与党3党基本政策閣僚委員会が開催された。そこでは3党による作業部会をつくり普天間基地「移設」先の再検討が決定された。沖縄県民の闘いによって、「年内決着」、つまり現行の「日米合意」通りの辺野古新基地建設案続行という結論を、ひとまず押し返すことができたわけだ。

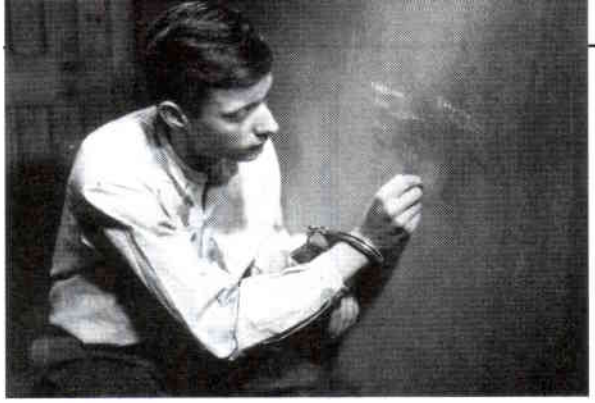
服部さんは、議員になったばかりで最初に直面した民主・社民・国民新党の3党連立合意から話を進めた。民主党は、政権の形成にあたって外交・防衛政策の面でマニフェストからも大きく後退しようとしていた。社民党は政権参加にあたって、最終的に項目を沖縄基地・米軍再編に絞り込み、さらにその文案をもとに基本的に民主党のマニフェストに沿った「合意文書」を作成するよう民主党に求めた。社民党の外交・防衛部会で服部さんも参加して最終の詰めを行い、結局、その要求を民主党も受け入れることになった。そこで「沖縄県民負担軽減」の観点からの「米軍再編」の見直し、日米地協定改定の提起とともに憲法問題について1項を起こし、「憲法の3原則」を生かすという「連立合意」文書がギリギリのところで作られることになった。

服部さんは、これで辺野古新基地案は止まると思った、と語る。しかしそこからの揺り戻しは続いた。岡田外相の「嘉手納統合」案、北澤防衛相の「辺野古以外の『移設』先は考えられない」という発言が錯綜し、米国や日本の「防衛利権」に群がる保守勢力、メディアはこぞって「日米同盟の危機」「安全保障の危機」を騒ぎ立てた。鳩山内閣はブレ続けた。11・8県民大会を成功させた沖縄県民のいらだちは極限に達した。

服部さんは11月末に事態が緊迫化したという。日米防衛・外交閣僚会合（2＋2）が予定され、そこで「辺野古滑走路の沖合移転」「普天間の訓練の一部移転」「地位協定に環境条項を入れる」という「辺野古修正案」でまとめる、という動きが浮上したからである。ある閣僚は11月末決着を公言し、11月30日には極秘で鳩山・仲井真（沖縄県知事）会談も行われたという。12月4日に米国は「2＋2」を予定し、12月7日には「辺野古修正案」が発表されたかもしれない。そこで社民党は、辺野古案をつぶすために民主党の説得に全力を上げた。福島社民党党首は、党首選への立候補にあたって「重大な決意」を語り、ジュゴンなど環境問題からのアプローチで民主党に働きかけた。そうした努力もあって「年内決着」は阻止できたのだが、攻防はこれからである。1月24日の名護市長選後の大阪・東京での1月末の集会に加えて、服部さんは『ニューヨークタイムス』への意見広告運動も構想している。

（文責：国富 建治、新しい反安保行動をつくる実行委員会）

二つのレジスタンス映画の名作



「抵抗――死刑囚の手記より」 監督・脚本／ロベール・ブレッソン　原作／アンドレ・ドヴィニー　撮影／レオンス＝アンリ・ビュレル　出演／フランソワ・ルテリエ、シャルル・ルクランシェ／原題 un Condamné à mort s'est échappé ou le vent soufflé où il veut　1956年フランス映画　97分／3月20日～4月16日　岩波ホールにて上映（「抵抗と人間シリーズ」2）

「海の沈黙」 監督・脚本／ジャン＝ピエール・メルヴィル　原作／ジャン・ヴェルコール　撮影／アンリ・ドカ　出演／ハワード・ヴェルノン、ニコル・ステファーヌ　ジャン＝マリー・ロバン／原題 le Silence de la mer　1947年フランス映画　86分／2月20日～3月19日　東京・神保町岩波ホールにて上映（「抵抗と人間シリーズ」1）

●「海の沈黙」の原作は、占領下フランスで地下出版された「深夜叢書」の第1作として広く知られ、戦後2年目に映画化されたが、日本では商業性に乏しいと見られ、映画祭を除き一般には未公開だった。

●物語は単純明快。占領下の地方都市でひっそり暮らす老人とその姪の家の2階がある日接収され、ドイツ軍将校が住みつく。将校はフランス語に堪能な音楽家で、礼儀正しくフランス文化への尊敬と愛を語るが、2人はそれに対し、終始無言で対応する。将校は一方的に、戦争によるドイツ文化とフランス文化の「美しい婚姻」など、彼が抱く夢想をしゃべりまくる。だが、休暇でパリを訪れ同僚の将校たちと話した時、彼の夢は嘲笑され、占領政治の目標はあくまでフランスの魂を破壊し、支配することだ、と聞かされる。絶望して戻った彼は東部戦線への転勤を志望、老人と姪に別れを告げる。姪は最後に一言、「アデュー」と言う。

●怒涛のように押し寄せて占領したドイツ軍に対し、フランス人は海のように深い沈黙で応えた。ドイツを代表するのが粗野で無慈悲な人物ではなく、洗練された教養人であることに注目したい。当時フランスが戦わねばならなかったのは、将校が語る「美女と野獣」の物語のような、和解の皮をかぶった懐柔のイデオロギーだった。のちにヴィシー政権派（対独協力派）と抵抗派に二分されたフランスの抵抗の出発点が、ここに静かに、明確に示されたのである。

●「抵抗」の作者、孤高の映画作家ロベール・ブレッソンについては、あらゆる映画史の本で多くが語られている。映画から演劇性・物語性を排除し、禁欲的ともいえるほど映像自体に語らせるその創作姿勢は、他の作家の追随を許さない、清冽かつ峻厳な世界を提示してきた。

●「抵抗」は、「田舎司祭の日記」に続いて彼がそうした作風を確立した記念碑的作品である。私たちは、主人公が入獄してからあらゆる機会を利用して準備を進め、ついに脱獄に成功するまでの行動を、微細にわたって目撃する。彼の心の動きは目には見えないが、盗んだスプーンで作ったノミを使って羽目板を削るその音から、生への強靭な意志だけが伝わってくる。劇的な場面、暴力の描写は注意深く抑制され、ナレーション（主人公の声）は感情を交えることがない。破いたシーツとベッドの針金を編んで命綱を作る場面で、「妹の髪を編むように、三つ編みに編んだ」と言ったのが、唯一の感情的表現である。

●ブレッソンは、囚人たちが自分の排泄物の入ったバケツを提げて歩くシーンで、厳粛な音楽（モーツァルトのハ短調ミサのキリエ）を導入した。彼にとって神とは、人間の営為に介入せず、ただそれを凝視する存在だったようにも感じられた。

（本野 義雄、本誌編集委員）

『「戦後時代」の夕焼けの中で――ポピュリズムとルサンチマンの同時代を読む』

（諸橋泰樹／現代書館／2200円＋税）

天野 恵一

著者は、私同様、本誌の編集委員である。私と彼のつきあいは、ほぼこのニュースの編集会議でのやりとりのみである。何冊も著作のある彼が、どういう仕事をしてきたのかは、書評紙などでの短文をいくつか読んだだけの私は、よく知らないまま時間が流れた。それではいくらなんでも失礼であろうと、今回、本書の書評を積極的に引き受け、読んでみた。

編集会議でのやりとりを通しての、私の著者に対する印象は、よく言えば「軽妙」、悪く言えば対立回避の「軽佻浮薄」。さてどちらが本当のところか、などと考えながら、第Ⅰ部「『戦後六〇年』をめぐる旅」、第Ⅱ部「憲法九条・二四条の実現へ向けて」、第Ⅲ部「ジャーナリズムのナショナリズム」、第Ⅳ部「マス・コミュニケーションの倫理と精神」、第Ⅴ部「批評精神、あるいは『小泉・ブッシュ時代』」、第Ⅵ部「『もはや戦後ではない』と言われた遠い時代に生まれて」で構成されている、短文の集めという べき本書を、一気に読み終わった。

なんと、意外に「生まじめ」な素顔がそこにあった。初出は本誌を含む、運動体のメディア（ニュース）から様ざまな書評紙などである。「まえがき」で著者はこう書いている。

「本書に収めた批評的散文を書いているときに常に念頭にあったのは、自分が50歳代であるこれからの10年間に、内外において経済的な危機、人種間の危機、戦争や大きな災害等が起きるだろうが、そのことに少しでも抵抗して社会的責任を果たしておくことにしておきたい、といった〝思い〟だった。だから、日本や米国の侵略がもたらしたコロニアルな場所のポストコロニアルな状況にある地域にも、行けるチャンスがあれば行っておきたいし、市民運動などコミットできることがあればコミットしておきたい」。

本書の内容は、この宣言を基本的に裏切っていない。「ヒロシマ・ナガサキ・サイパン」などを動き回り、マス・ジャーナリズムの権力に加担した操作的な情報支配のありようを具体的に批判することを媒介にした、国家権力（主要は小泉・安倍政権時代の）批判の言葉がそこにあふれている（書評も時評のスタイルで通している）。著者がこだわっている戦後は、戦争への「抵抗」としてあった意志であり運動としての〈戦後〉である。本書に一貫する黄昏れてしまったそれに、だからこそこだわり抜こうという「志」に、共感した。

苦言を一言。「ジェンダー、カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアル……」、すこぶる抽象的にカタカナ文字が飛び交いすぎる文体は、なんとかならないか。それと本や〈部〉のタイトル（サブタイトル）の説明的長さはどうだ。これは著者が本書で紹介している精神、本誌に集う元べ平連の「老人」たちの文化的な「遊び」の精神の許容範囲をはるかに超えているのではないか？

（あまの・やすかず、本誌編集委員）

◎117号の訂正◎

お詫びして訂正します。

・5ページ2段目1行目
（誤）「ni。」→
（正）「仕分けの対象外に。」

・18ページ2段目後ろから2行目
（誤）「2008」→（正）「2003」

・34ページ3段目後ろから11行目
（誤）「長谷川修二」→
（正）「長谷川修児」

Information

【東京】2月3日（水）～17日（水）「開高健とベトナム」展 ●会場：青梅市立美術館（JR「青梅」駅徒歩5分） ●無料 ●連絡先：青梅市立美術館 TEL0428-24-1195（8～10日、15日休館）

【東京】2月5日（金）緊急企画「市民による『事業仕分け』―― 2010年度防衛予算を斬る！」 ●仕分け人：杉原浩司「PAC 3用改修費（639億円）「ミサイル防衛」経費（1225億円）」、木元茂夫「ヘリ搭載護衛艦建造費（1208億円）」、山口響「海兵隊グアム移転費（472億円）を含む「米軍再編」経費（1077億円）」 ●会場：富士見区民館洋室C（JR、有楽町線、南北線、東西線、大江戸線「飯田橋」駅徒歩5分、「国連・憲法問題研究会」名で借りています） ●時間：19:00～ ●資料代：500円 ●主催：「防衛予算仕分け」市民集会実行委員会、連絡先：ピープルズ・プラン研究所 TEL03-6424-5748、FAX03-6424-5749

【東京】2月6日（土）～7日（日）もんじゅツアー「原子力機構の2～3月再開は無謀・無理だ」 ●旅程：新幹線1泊 ●目的：①現地でビラまき・マイク、②現地の名物を食べ名所を見学 ●主催：いろりばた会議（たんぽぽ舎気付）TEL03-3238-9035、FAX03-3238-0797

【東京】2月8日（月）国連・憲法問題研究会「安保50年の『日米同盟』を読み解く――普天間問題・米軍再編の行方」 ●講師：半田滋（東京新聞編集委員） ●会場：文京区民センター（地下鉄三田線「春日」駅、地下鉄丸の内線・南北線「後楽園」駅すぐ） ●時間18:30～ ●参加費：800円 ●主催：国連・憲法問題研究会（工人社気付） TEL03-3264-4195、FAX03-3239-4409

【東京】2月13日（土）派兵チェック解散集会「反派兵運動の20年をめぐって」 ●討論者：武藤一羊、湯浅一郎、天野恵一 ●会場：文京区民センター（地下鉄三田線「春日」駅、地下鉄丸の内線・南北線「後楽園」駅すぐ） ●時間：2:00～ ●資料代：500円 ●主催：派兵チェック編集委員会

【大阪】2月20日（土）講演会「日韓併合の100年――今、小田さんならどうするか」 ●講師：子安宣邦 ●会場：山村サロン（JR「芦屋」駅前ラポルテ3F） ●時間：14:00～ ●参加費：1000円 ●主催：「小田実を読む」 ●連絡先：山村サロン TEL079-738-2585

【東京】2月20日（土）HOWS講座「憲法を活かし、壊憲手続法〈国民投票法〉施行を許さないために」 ●講師：内田雅敏（弁護士）「憲法9条と自衛隊――『法服の枷』をみて考える」 ●会場：本郷文化フォーラム（地下鉄丸の内線・大江戸線「本郷三丁目」駅徒歩5分） ●時間：13:00～ ●参加費：1500円（学生1000円） ●問合せ：HOWS事務局 TEL03-5804-1656

【東京】2月20日（土）日本ペンクラブ女性作家委員会シンポジウム「女性と政治――大臣に訊く、女性の政治参加・貧困・表現」 ●対談：福島瑞穂（男女共同参画・少子化担当大臣）、雨宮処凛（作家） ●会場：東京ウィメンズプラザ（地下鉄銀座線・半蔵門線「表参道」駅徒歩5分） ●時間：18:00～ ●資料代：1000円 ●主催：日本ペンクラブ TEL03-5614-5391

【東京】2月27日（土）～ ドキュメンタリー映画「しかし それだけではない。加藤周一 幽霊と語る」 ●監督：鎌倉英也 ●会場：渋谷シネマ・アンジェリカ（渋谷区道玄坂1－18－3フジビル37－B1）他順次ロードショー ●上映時間：10:00、12:00、14:00、16:20～ ●入場料：当日大人1800円 ●連絡先：TEL03-5459-0581

【東京】2月27日（土） 東京大空襲65周年朝鮮人犠牲者追悼 国際シンポジウム・追悼会 ●国際シンポジウム 会場：江東区文化センター レク・ホール（地下鉄東西線「東陽町」駅徒歩5分） 時間：9:30～ ●追悼会 会場：東京都慰霊堂（地下鉄大江戸線「両国」駅徒歩2分横網公園） 時間：3:00～ ●会費：1000円 ●主催：東京朝鮮人強制連行真相調査団 TEL・FAX03-3812-7081

【東京】3月20日（土）「戦争も基地もいらない WORLD PEACE NOW 3．20」 ●会場：芝公園4号地（JR「浜松町」駅徒歩12分、地下鉄三田線「御成門」駅徒歩2分、地下鉄大江戸線「赤羽橋駅」徒歩2分） ●開場：12:00（開会13:00～） ●パレード出発：15:00～（雨天決行） ●発言：志葉玲（ジャーナリスト）、大河内秀人（パレスチナ子どものキャンペーン）ほか ●主催：WORLD PEACE NOW http://www.worldpeacenow.jp/ ●連絡先：市民連絡会気付 FAX03-3221-2558

P.21へ続く

事務局だより

詩集・歌集・デモなど

吉川　勇一

■多くの方から事務局に賀状をいただきました。ありがとうございます。私は、自分の賀状では、毎年、憲法記念日の反改憲意見広告運動への協力依頼も載せています。それで、何人もの知人から、運動のチラシの希望が届いてきます。やっていない方は、今年の末には、考えてみてください。

■昨秋から、事務局宛に会員の方からたくさんの著書が贈られています。『市民の意見』の毎号の巻頭に詩が載っているからでしょう、詩集や歌集も多く頂いています。今号では、毎年の反改憲意見広告で素晴らしいレイアウトをしてくださる鈴木一誌さんのご母堂、鈴木サダ子さんの歌集（09年12月）から載せさせていただきましたが、それ以外にも、詩のご協力をよくして下さってきた詩人の長谷川修児さんからは、ご両親を追悼する詩集『緋』（09年12月）を、08年の109号で寄稿をされている青梅市の会員の崔龍源さんからは詩集『人間の種族』（09年12月）を、また、意見広告運動に賛同されている赤磐市の松岡正富さんからは少し前ですが、歌集『若きらよ　アーチクル・ナイン』（07年3月）を頂いています「海（わた）の底に銃抱き眠れる万骨の響（とよ）みはひねもす鳴り止まぬ耳」。どれにも平和の気持ちのあふれた感動的な詩や歌が含まれています。それぞれを全部本誌に載せきれないのが残念です。

それ以外に、ご高齢で退会をされた井上俊子さんからは『イノウエ　トシコ　90歳からの訴え』（09年10月、上の写真）という、毎ページに自作のカラーの絵が載った絵と文の立派な本を頂きました。終わりの文には「老いた日のために年金格差なしでの安心、そして働く場（時）での健康保持、そして子女のための教育の補償を中心に、生産性に応じた国際的な標準を実現させることに、そして家族単位から脱した個人の確立を、現憲法のまっとうな施行を要求すべきでしょう」と書かれてあります。また、ぶな葉一作・関口コオ絵の『泣いたゼロ戦』（09年10月）という鈴の音童話も贈られました。ありがとうございます。

■本号の締切りには間に合いませんが、1月30日には、東京・日比谷野外音楽堂で、普天間基地を許さない全国集会があり、1万人を目標のデモがあり、本会の事務局も参加し、意見広告のチラシを多数配布する予定です。また、2月15日（土）夕刻は、東京「武蔵野・三鷹アンポ粉砕ちょうちんデモの会」の定例デモが第700回となります。この回数の数字には感動します。これにも事務局から多くが参加するでしょう。一方、毎週土曜日の夕方、新宿駅西口地下広場で続いている「反戦意思表示」は、2月6日（土）が7年目、第361回です。この中心の大木晴子さん（会員）のサイトはアクセスがとても多いのですが、最近、鈴木一誌さんがレイアウトした記念のバッジまでできたようです（左の写真）。もっとも、92年1月から続けられている国会前での、日本軍「慰安婦」問題の解決を求める「水曜デモ」は、先日の1月13日で900回目だそうで、これは凄いですね。60年安保闘争満50年の今年、デモや集会の機会は多くなると思います。どうぞ、ご一緒に。

■本会の会員は12月末でついに2050名となりました。うち843人がシルバー会員で、38人が障がい・病中などの会員です。高齢化は進んでいます。ぜひ周辺の若い方々に『市民の意見』をお勧めください。

■2月19日（金）の「読者懇談会」は中川六平さんの「ほびっと」の話、そしてチラシ同封の2月20日（土）午後の「憲法9条・25条実現講演会」は、全力を挙げている催しです。ぜひぜひ多くの方々を誘って、ご参加してくださいますよう。（10/01/15記）

（よしかわ・ゆういち、事務局・編集委員）

読者のおたより

◆世界に、自分に

奈良県奈良市　東　良江

世界に、自分自身にもう武力は必要ないといえる時が来た。

◆40数年前の「べ平連」

大阪府大阪市　小山高澄

いつも多種パンフ差し入れありがとうございます。40数年前の「べ平連」への送金を思い出します。

◆長生きできる国を

埼玉県北本市　黒田順子

真綿で首を絞めるかのように生活は苦しくなり、介護認定前に弱っていく義父。長生きしてゴメンナサイの国はゴメンだ!!今後もよろしくお願い!!

◆政権交代はよかった

香川県高松市　松崎宏紀

遅すぎたが政権交代してよかったと思います。逆に言うと、自公右派政権が駄目すぎたと思います。

◆昨年8月の衆議院選挙では

東京都豊島区　磯谷佳世子

8月の衆議院選挙では9条と25条を基盤に活動する政党とその候補者に投票しました。比例区はともかく選挙区は死票に成り果てました。予想はしていたものの、やっぱりドヨヨ～ンとなりました。ちなみに当選者は民主党の江端貴子氏でした。115号を読み元気をつけています。

【＊お便りは、昨年9月にいただきました。編集部】

◆小異を捨て大同団結を

千葉県船橋市　吉村りよみ

朝日新聞に小沢一郎の改憲スケジュール予測が出ていました。そうさせないように小異を捨てて大同団結して頑張りましょう!

◆政権交代に市民の魂を入れよう

東京都武蔵野市　野津　功

首相の資金力で実現した政権交代。作られた仏に魂を入れるのは市民です。

◆政権交代でがんばろう

静岡県静岡市　鈴木孝子

昨年のノーベル平和賞、広島の秋葉市長こそ!　しかし、大国アメリカ大統領の廃核演説でオバマさんに～知名度、核廃棄活動には宣伝力が大!　アフガン進駐はなぜ?　私たちが平和について強い意志表示が必要。政権交代でがんばろう。

◆いつも中身の濃いニュース

神奈川県逗子市　大井毬子

いつも中身の濃いニュースをありがとうございます。今年もよろしくお願いします。

◆無言館の絵に感動

東京都八王子市　木川洋子

いつも会報ありがとうございます。無言館の絵に感動します。

◆いつも面白い

京都府京都市　大沢真一郎

いつも面白く読んでいます。これからもよろしくお願いします。がんばってください。

◆元気をいただいてます

東京都江戸川区　加登高一

いつも力いっぱいの編集に元気をいただいています。ありがとうございます。

◆これからも読者のひとりでいます

新潟県長岡市　片山まり

「市民の意見」のなかで、ときどきキラリ光る文章にめぐり合えますので、やはり、読者のひとりでいたいと思います。よろしく。

◆21年前の設立から

千葉県市川市　四本仁子

2010年7月に70歳になります。88年の市民の意見30の会の立ち上げ集会は青山通りの赤坂公会堂で行われました。小田実さん、吉川さん、音楽のパフォーマンスで小室等さん、長谷川きよしさんなどの演奏もあり、カッコいいスーツ姿の辻元清美さ

んのコメントもありました。あれから21年経ちました。民主党政権に期待したいと思います。

◆82歳、今年も頑張り続ける

兵庫県尼崎市　杉本昭典

恥ずかしながら16歳で海軍少年兵として敗戦を迎え、反乱するも説得され復員、解雇、戦後復活メーデーに初参加、共産党員となり活動。19歳、教育闘争でMPにピストルを突きつけられ逮捕される。22歳、レッドパージで解雇。その後、反党分子として除名されるが反戦、平和、社会変革を目指して微力ながら歩みつづけ、82歳を迎え、まことに老々介護とガン闘病中のなか「9条」を守り、今年も頑張ろうと思う。よろしく。

◆いま、チェーンジのとき

千葉県千葉市　長谷好男

我が国のチェーンジのとき。がんばってください。

◆助け合える社会を

兵庫県宝塚市　道上朝子

政権は変りました。が、心も頭もさらに使って、平和で互いに助け合える心をもった社会をめざしたいですね。

◆米軍住宅建設反対を

神奈川県逗子市　丸山秀邦

池子の森、横浜逗子地区を結ぶ道路地下駐車場（900台）、トンネル、横浜地区への原子力空母要員住宅700戸の建設が押しつけられています。20年前にもました市民の反対運動を…とガンバっています。友人より紹介され、少しですが…。戦争への道は絶対に反対ですが、何となく不安な感じがします。

◆いまこそ安保破棄を

京都府京都市　加藤敦美

「坂の上の雲」のアジア侵略を引きついだのが悪魔帝国アメリカ。自分の後継者アメリカに依存した天皇制日本。アメリカは天皇の日本を丸呑みした。日本人は天皇がいるから自分たちは独立国だと思い込みアジア侵略の後継者アメリカと共同していることを民主主義と決め込んでいる。日米共同して沖縄を踏みつけにしてきた60年をまだ続けるのか。もうダメだよ！　社共政権で安保破棄せよ。

◆日米同盟の解体を

奈良県香芝市　島田雅夫

普天間基地撤去、辺野古に基地を作らせないためには、「日米同盟」神話解体が必要不可欠と思います。

◆民主党に強く要望します

東京都中野区　近藤悠子

日米軍事同盟を全面的に見直し米基地を返し、アジア全体との平和外交に切り替えなければ。民主党に強く要望します。

◆共有するものを

大阪府高槻市　三上弘志

政権交替とはこういうことなんだと思うことが多い昨今、予想していたこととは言えギクシャクや困惑、マア、未曾有の出来事だから当たり前といえば当たり前。漸進的ならざる得ないのでしょうが、「これだけは！」をどう共有するかでしょうね。

◆世界にひろがれ

京都府京都市　高橋純一

いつも＜こころ＞ある内容、ありがとうございます。沖縄の子どもさんの詩、大変感動です。子どものこころに育つ、人へ、自然へ、全てに愛、やさしさは、〝沖縄〟という場に限定されるのだろうか、世界に更に拡がることを希望します。

◆新政権に基地と経費の縮小を

神奈川県横浜市　前畑ゆかり　章子・京子

独立国家であるはずの日本はいつまで米国軍に基地と莫大な経費を献上し続けるのでしょうか。戦勝国気取りで64年以上占領しているとしか思えないのに、なぜ今までこの状態を許したのか。新政権、新首相に気概を込めて是非、縮小をと期待します。

「読者のおたより」の多くは、会費納入の際の郵便振替票に書かれているメッセージを使わせていただいています。掲載について匿名をご希望の方は、その旨明記していただけると幸いです。

編集後記

はや2月ですが、本号は2010年の新年号になります。遅ればせながら明けましておめでとうございます。今年がみなさんにとってよい年になりますよう願っております。ですが、基地、安保、貧困、失業、問題は山積したままです。在日する朝鮮の人びとに対する暴力など、すさんだ事件も相次いでいます。今年が少しでも明るい年になるよう、本誌『市民の意見』および意見広告運動はささやかながら頑張ってまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ナチスの犯罪に時効はありません。日本が戦時中アジアに対して犯した人道に対する罪ももちろんですが、米国の原爆投下という犯罪にも時効はないでしょう。本誌安川さんの論考でも述べられていますが、9・11をきっかけに始まった03年3月の米・英主導によるイラク戦争に対して、それを支持し派兵していたオランダが1月12日、国際法違反だったとする政府の独立調査委員会報告を出しました。英国の動きは細井さんの論考にあるとおりです。引退を決め込んでいる米国のブッシュ元大統領と日本の小泉元首相に対する追及はなされないのでしょうか。

●1月24日、沖縄県名護市長選で辺野古移転反対派が勝利。目が離せませんね。（諸橋）

●編集委員　天野恵一、阿部めぐみ、有馬保彦（次号担当）、岡安英治、杉内蘭子、高橋武智、高岡甫雅、西田和子、野澤信一、道場親信、本野義雄、諸橋泰樹（本号担当）、吉川勇一、吉田和雄

●訃報　会員のご逝去の報をご遺族からいただきました。

福家俊明さん（滋賀県大津市）

樋口篤三さん（埼玉県新座市）

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

会計報告

昨年は、有権者の力により政権交代という大きな政治転換を果たし、新政権への期待と不安を抱きつつ新しい年を迎えました。

まだまだ経済や雇用の安定、庶民の暮らしの先行きは見えてこないままですが、今期の会計はおかげさまで黒字になりました。

また、09年度の基本会計の収支もホンの少しですが黒字で年を越すことができました。会の財政の安定はニュース作りに励む編集者にとっても、会を運営する事務局にとっても大変ありがたいことです。おかげさまで、使いづらかったノートパソコンを昨年末に買い換えることができました。

私たち市民の声がニュースを通して政治や社会に届くよう、スタッフ一同、持てる力や許される時間の中で協力しあいながら頑張っていきたいと思っております。今年もどうぞよろしくお願いいたします。（上口）

市民の意見30の会・東京 2009年11月～12月会計

（単位：円）

1. 収入	
一般会費	276,500
協力会費	105,000
敬老会費	220,000
障害者会費	15,000
（会費小計）	616,500
カンパ	182,410
ニュース販売	4,800
バッジ等販売	0
集会入場料	2,000
預り金（*1）	156,500
立替金清算（*2）	800,000
収入計	1,762,210
2. 支出	
印刷費(*3)	260,400
発送費(*4)	157,440
通信費	28,386
事務用品費（*5）	109,220
消耗品費(*6)	18,573
編集費(*7)	4,321
会場費	2,000
交通費	75,720
事務所費	110,000
光熱費	7,421
手数料	60,605
諸会費(*8)	4,000
雑費	1,449
立替金(*9)	126,180
支出計	**965,715**
3. 収支	**796,495**
前期からの繰越	7,774,677
次期への繰越	8,571,172
4. 残高の内訳	
会基本会計	5,471,936
条約基金	176,715
F/I基金	2,665,820
預り金	256,701
計	**8,571,172**

注（*1）意見広告賛同金預り￥155,500、新安保実賛同金預り￥1,000。（*2）前期から意見広告への立替金を回収。（*3）ニュース117号印刷費。（*4）ニュース116号発送費。（*5）ノートパソコン￥108,800、ファイル等。（*6）名入り定形封筒作成費￥13,493、トナー代￥4,980他。（*7）参考図書￥2,321、ニュース原稿作成料￥2,000。（*8）大阪意見広告賛同金。（*9）事務所家賃12-1月分、光熱費等意見広告負担分。9-10月分の意見広告との精算は、今期会計には間に合いませんでしたので、次期の会計に繰越します。